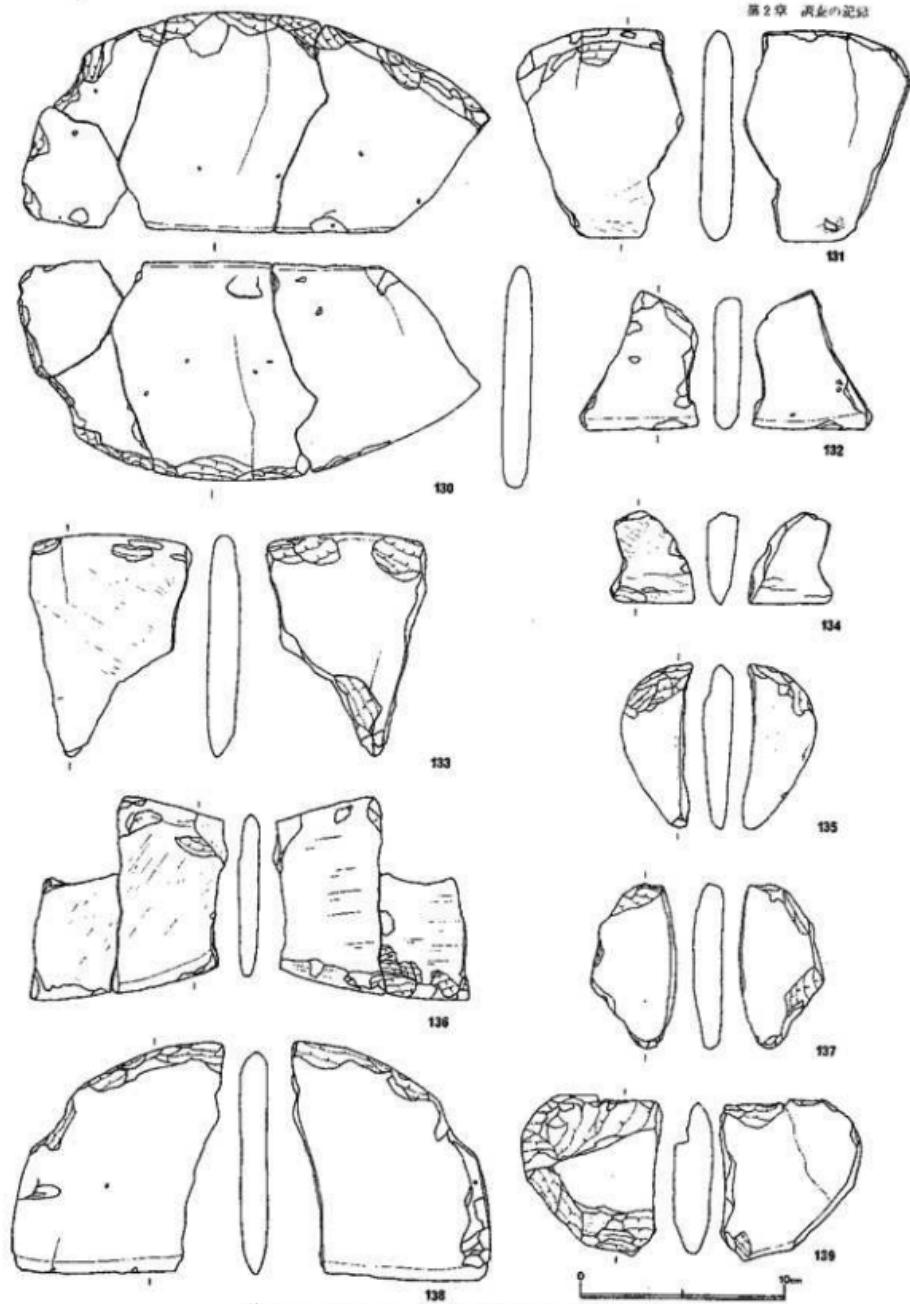
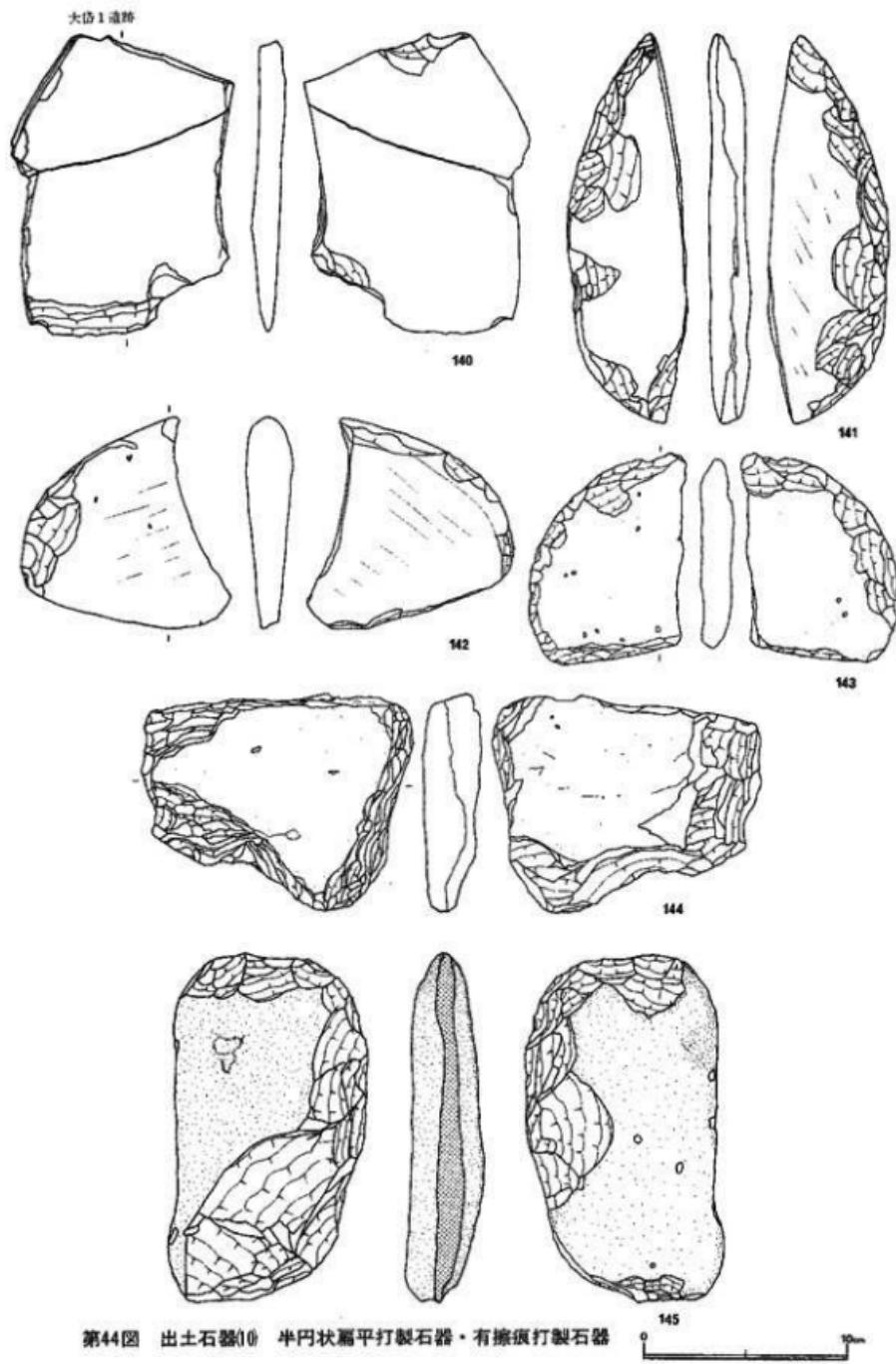


第42図 出土石器(8) その他の石器

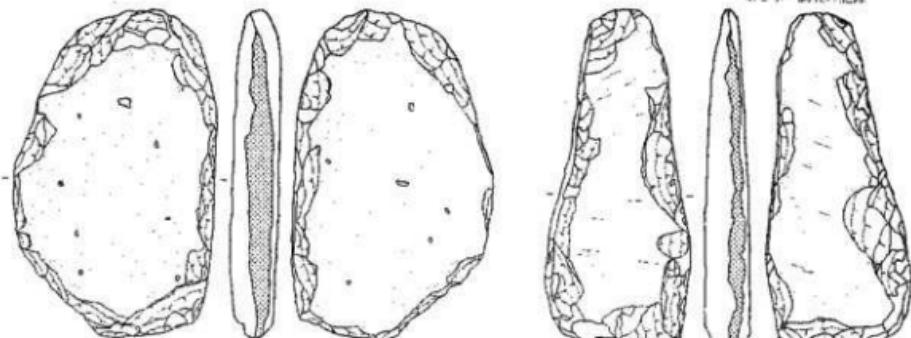


第43図 出土土器(9) 半円状扁平打製石器



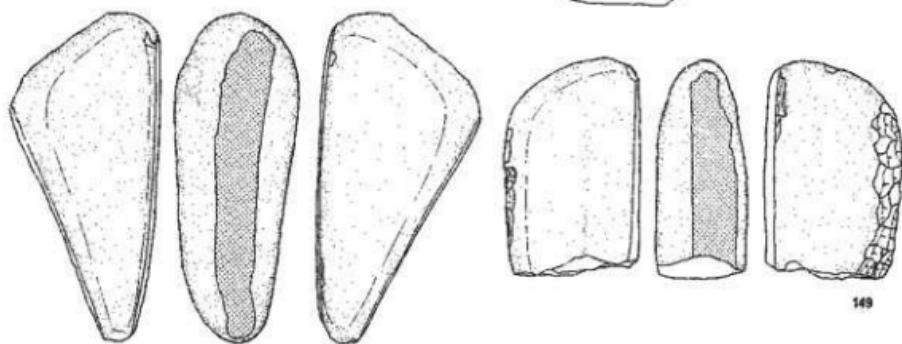
第44図 出土石器(10) 半円状扁平打製石器・有擦痕打製石器





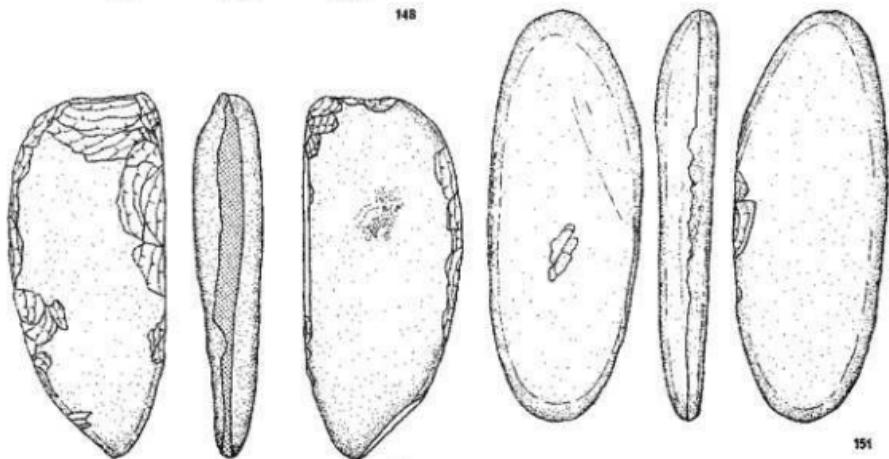
146

147



148

149



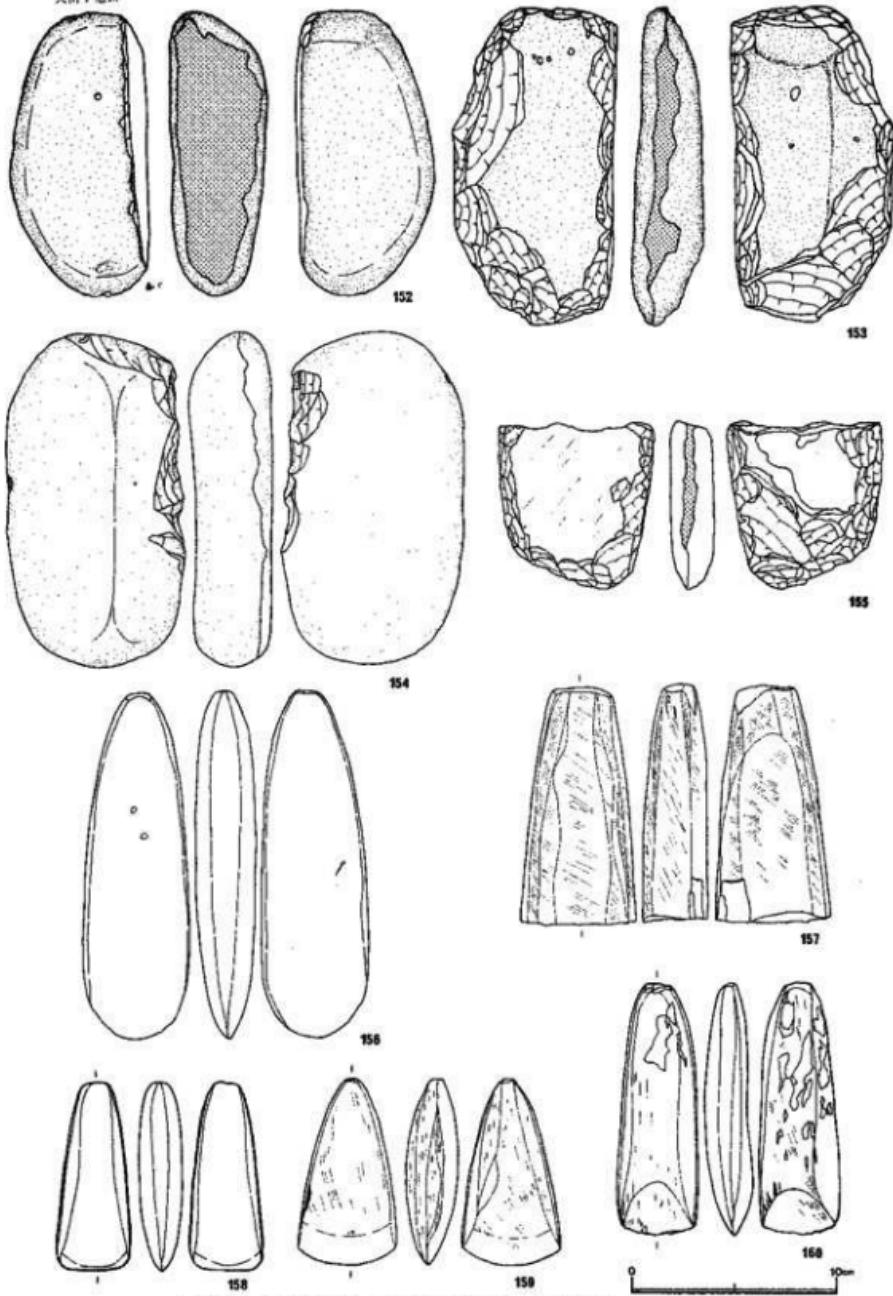
150

151

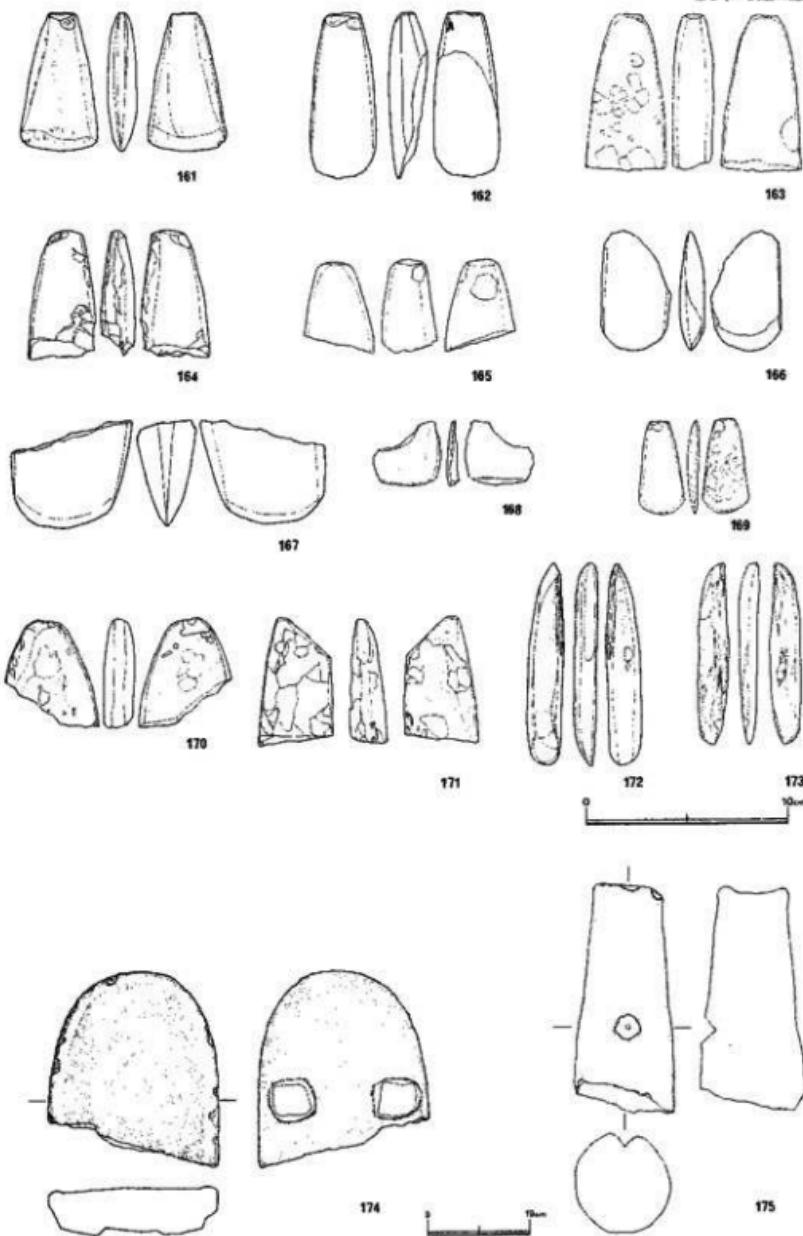
第45図 出土石器(1) 有擦痕打製石器



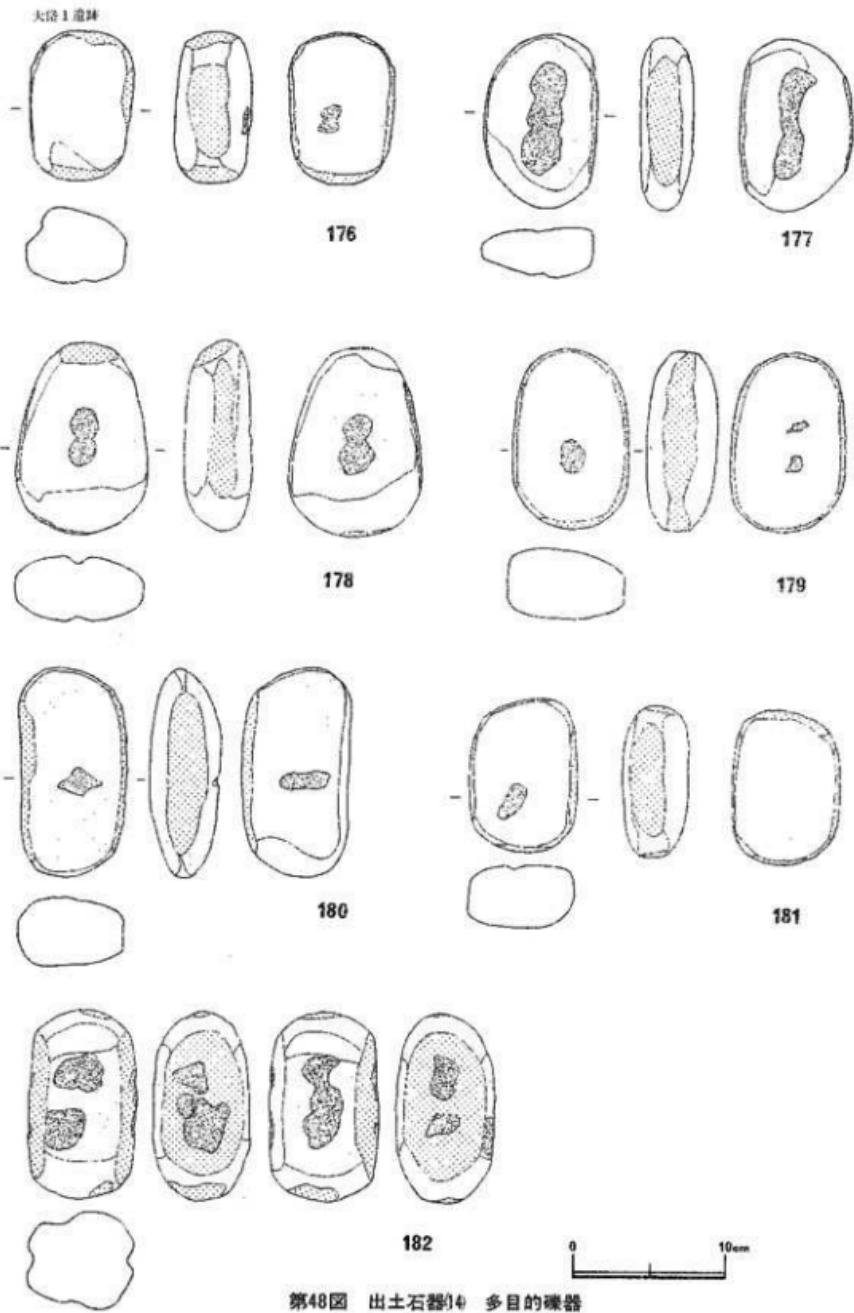
大筋 I 遺跡



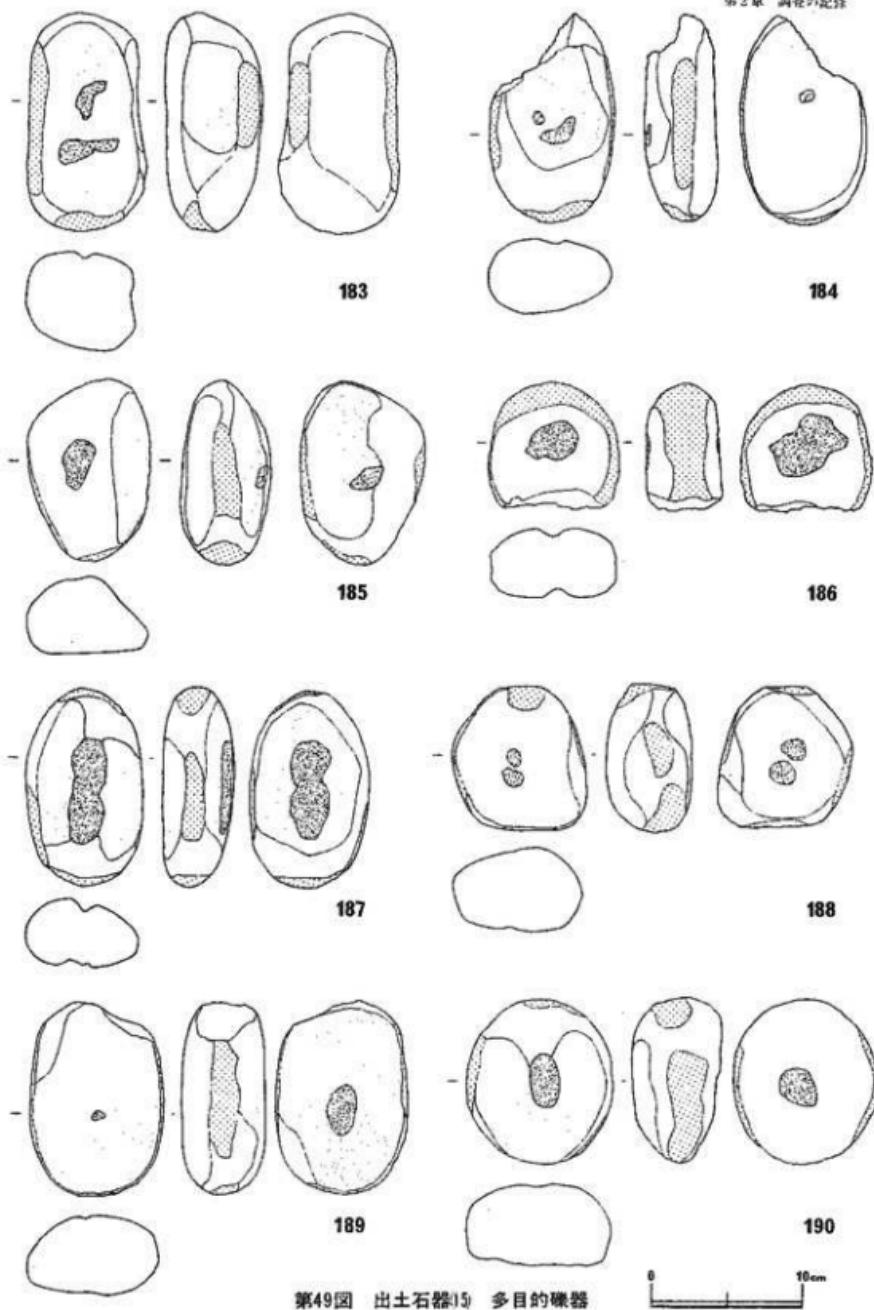
第46図 出土石器(12) 有擦痕打製石器・磨製石斧



第47図 出土石器(13) 磨製石斧様石製品・石皿・石棒

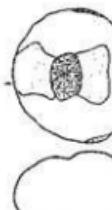
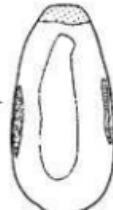
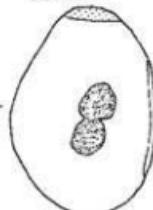


第48図 出土石器14 多目的穧器



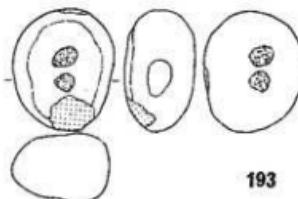
第49図 出土石器(15) 多目的礫器

大倍 1 倍



191

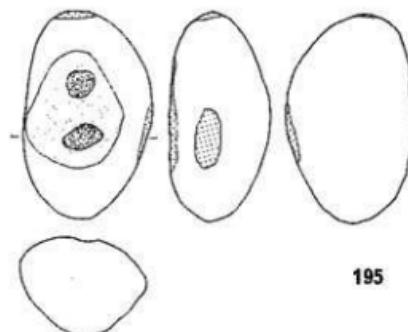
192



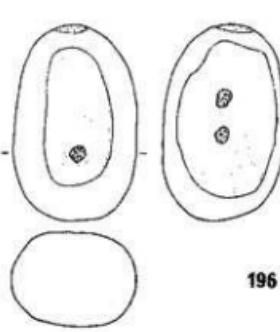
193



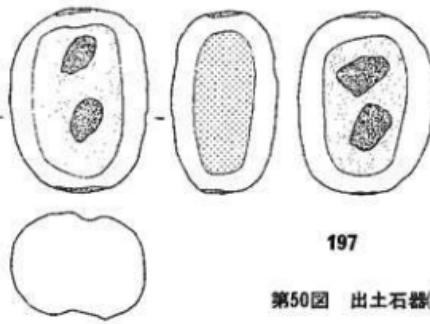
194



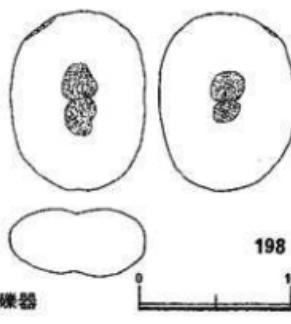
195



196



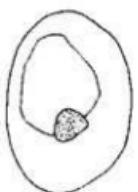
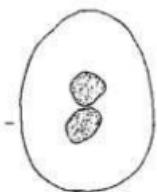
197



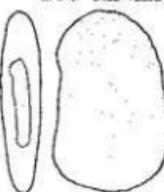
198

第50図 出土石器(6) 多目的砾器

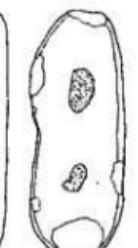
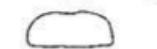
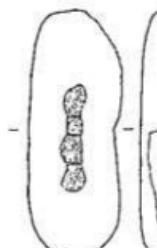




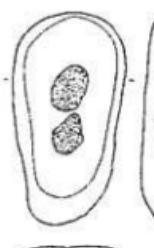
199



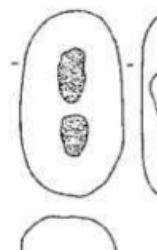
200



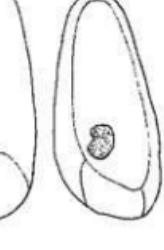
201



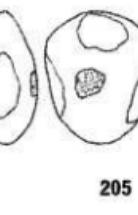
202



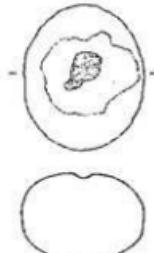
203



204



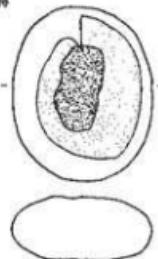
205



206

第51図 出土石器(17) 多目的器

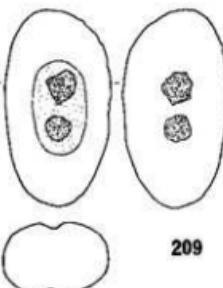




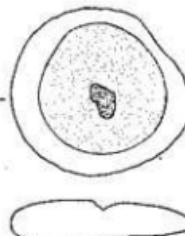
207



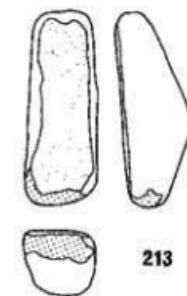
208



209



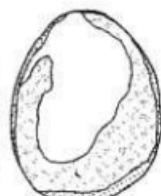
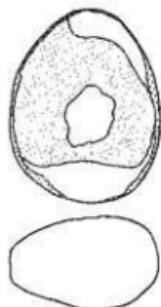
210



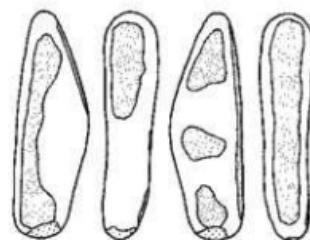
211



212



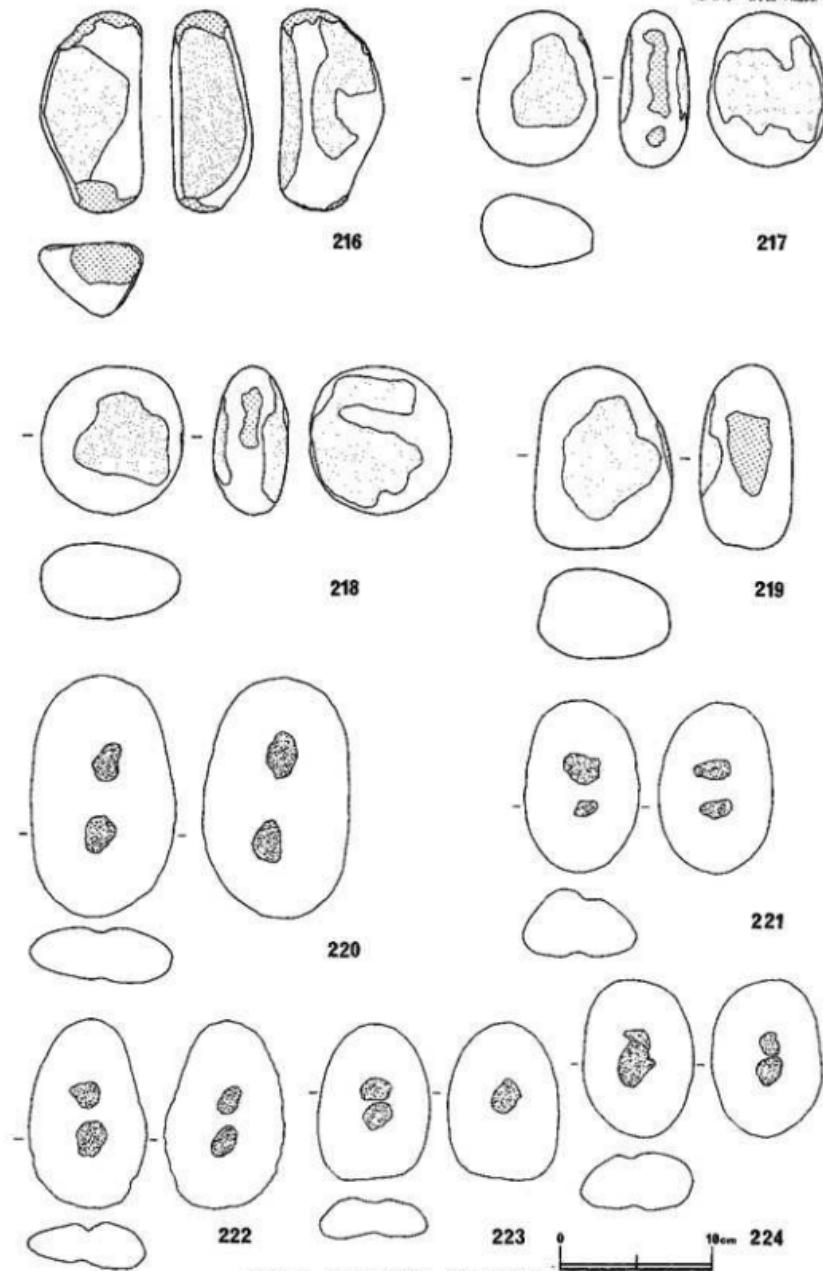
214



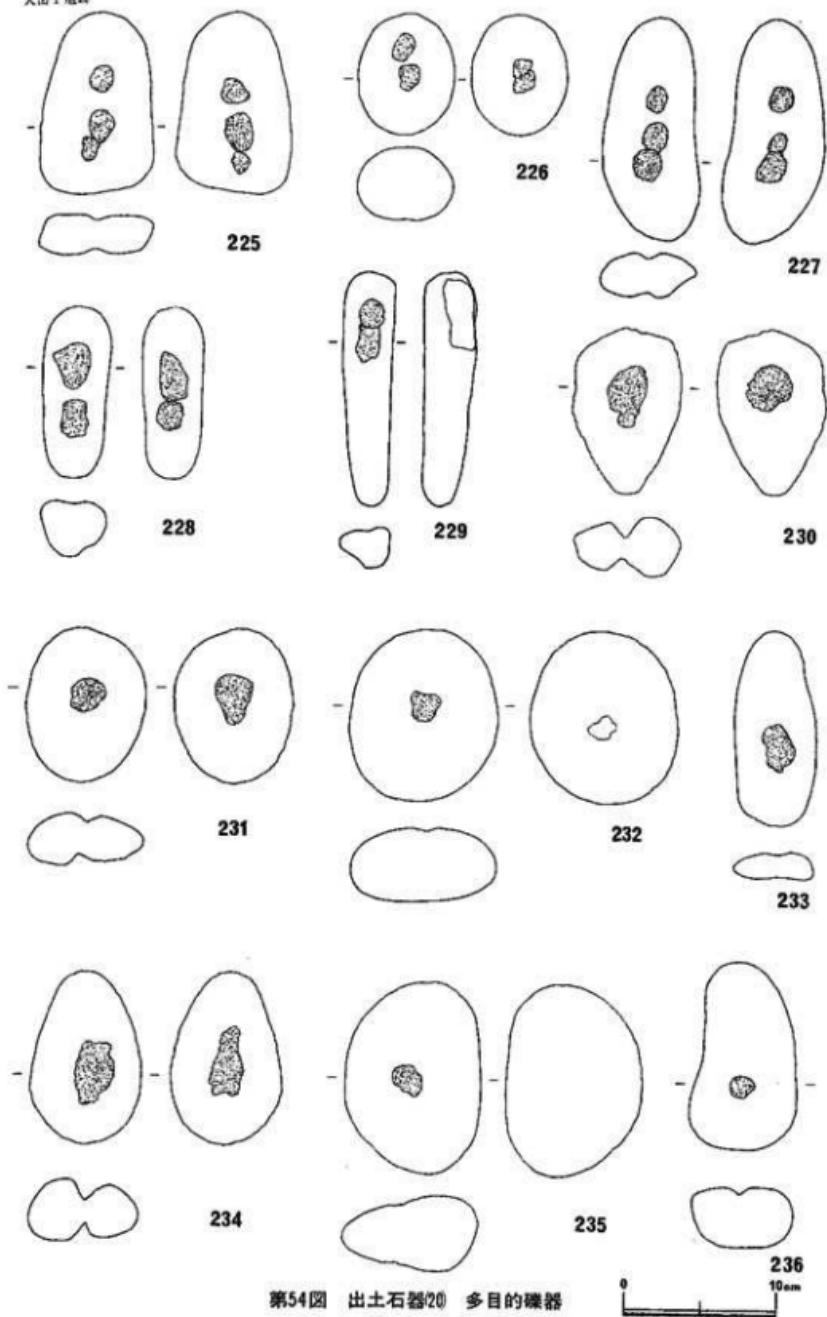
215

第52図 出土石器(10) 多目的砾器



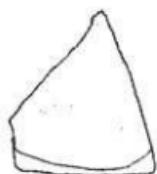


第53図 出土石器(19) 多目的礫器

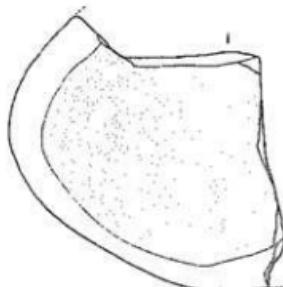


第54図 出土石器20 多目的礫器

0
10mm



237



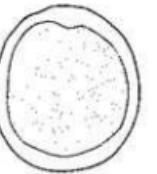
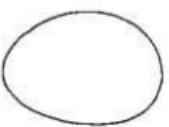
238



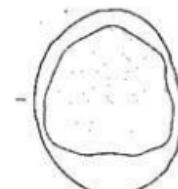
239



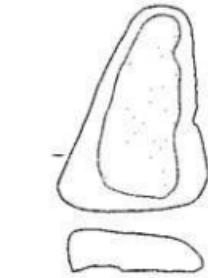
240



241



242



243

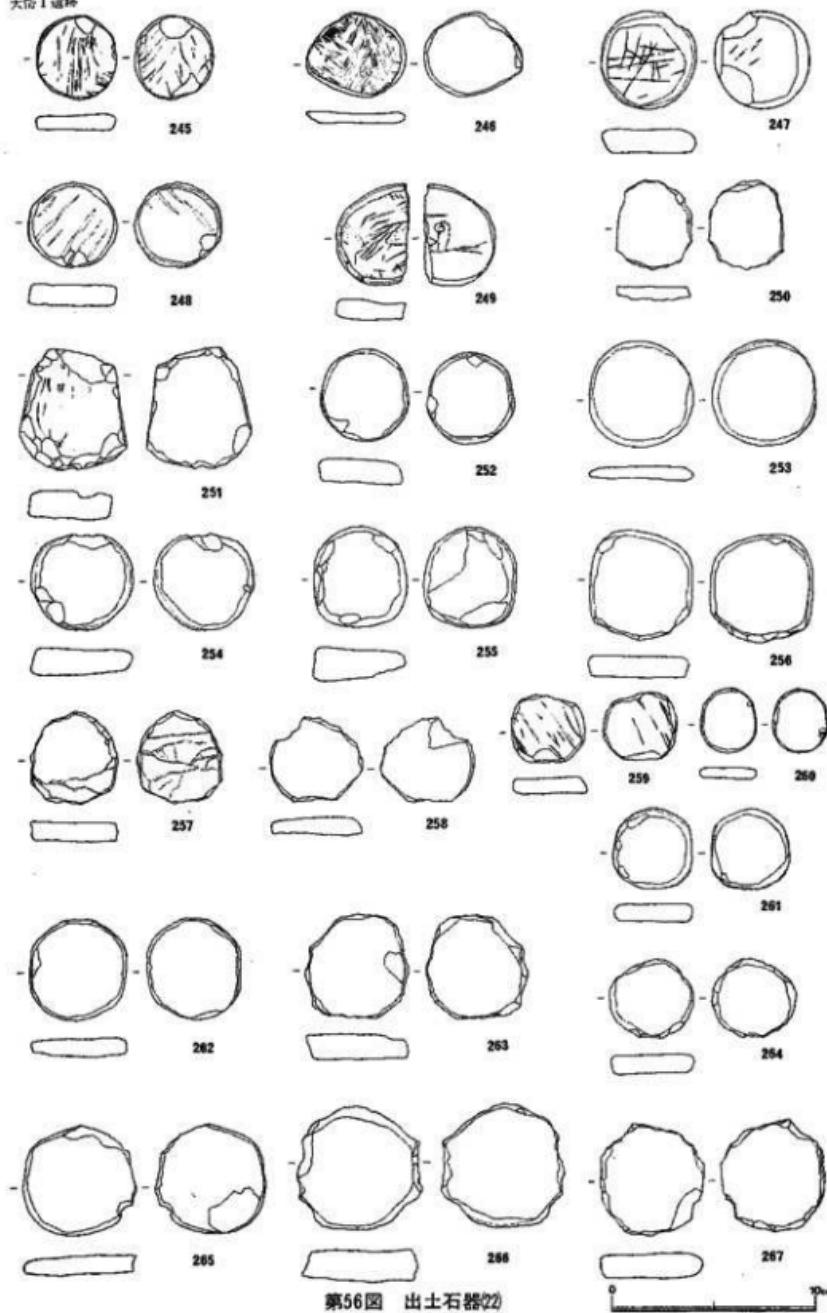


244



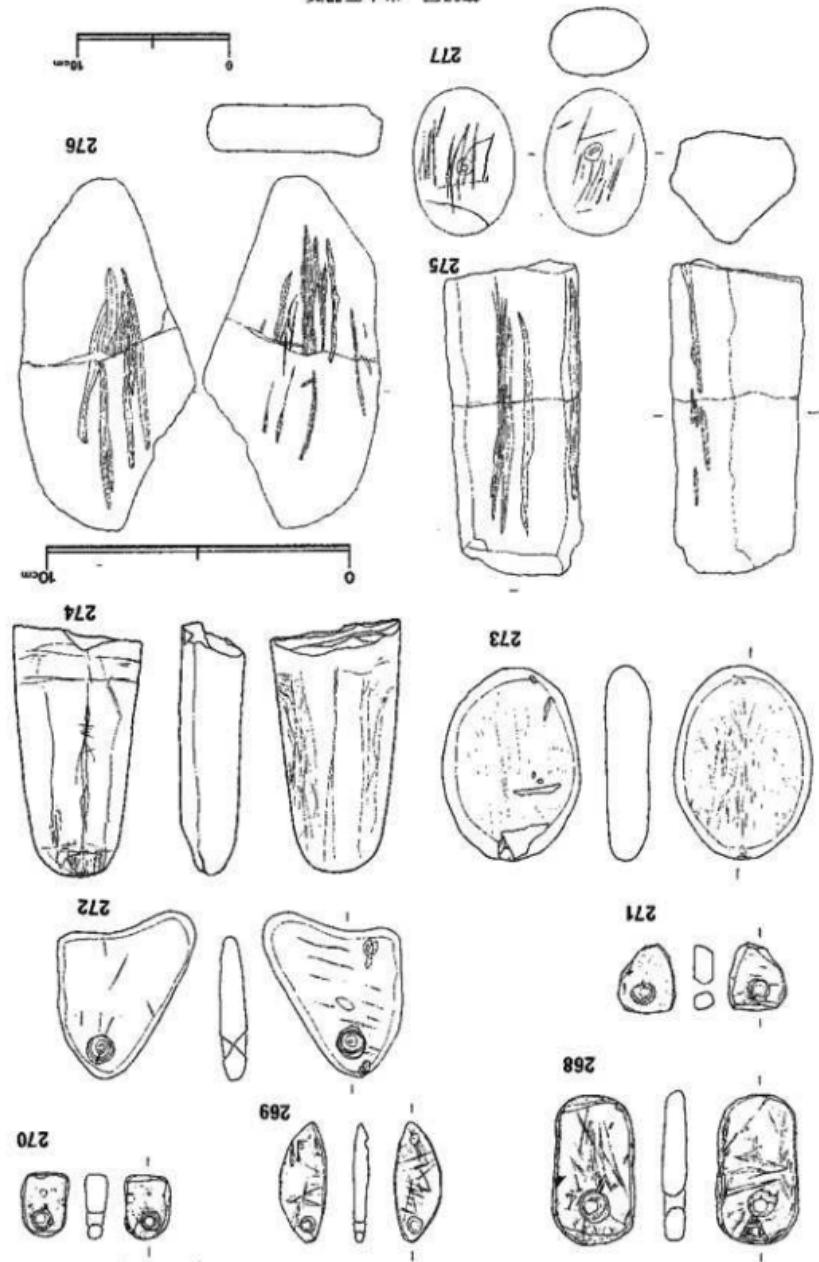
第55図 出土石器21)

大岱 1 遺跡



第56図 出土石器22

圖57 出土石器



もに統一性はなく、思い思いの石材に孔を穿って垂飾としたものであろう。268は硬質の泥岩を素材とし、これを小判形に仕上げ、孔をあけたものである。表面の孔の上部には逆三角形の浮彫がある。この逆三角形の中には目と口が表現されたと思われる丸い小さくぼみがあり、全体としては顔の意匠であると思われる。269は凝灰岩、270、271は安山岩、272は泥岩を原材としている。272の孔は完通していない。

線刻礫（第57図274、図版43）調査区北東端部の後期の遺物包含層から出土した。細長い安山岩の両面に極細の浅い線刻を施したものである。表・裏面とも中央2~3条の縦線、その両側にこの縦線に平行する線を描いており、裏面ではそれが1条づつであるが、表面のそれは数条づつで、下端で外側にカーブしている。裏面の先端部には短い条が並び、下端には横に2本平行な条が走っている。この安山岩は途中で折れているが、この線刻が図示した範囲で終るものか、あるいはもっと続きがあったものは不明である。また、この線刻が描いたものが何であったのかは不明である。

有擦痕礫（第57図273、277、図版43）円礫に無数の擦痕をもつものである、273は泥岩277は安山岩である。

有溝礫（第56図275、276、図版43）角礫などに数条の擦った結果できたと思われる溝を持つものである。砾石と思われる。石材は275が石英安山岩、276は砂岩である。

円盤状石製品（第56図245~267、図版43）安山岩、石英安山岩、粘板岩、泥岩、凝灰岩などの扁平でうすい石材を丸く打ち欠いて円盤状にしたものである。製品の直径は3~6cm厚さ0.5~1.5cmである。245~249、252~256、259~262、264のように、表裏面あるいはどちらか一面を擦って、扁平にし、さらに全周かその一部も擦っているものと他のように単に打ち欠いただけのものとがある。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

遺跡のほぼ全域にわたって弥生時代の遺物が散見された。遺物は、第3層大湯軒石層下の第4層暗褐色土層（チョコレート色を呈する）の上位及び中位から出土した。

1 発見遺構と遺物

遺跡のほぼ中央部で、弥生時代の土壙2基が発見された。土壙の周囲には、他の遺構・遺物が集中することもなく土壙が単独で存在した。

(1) 土壙

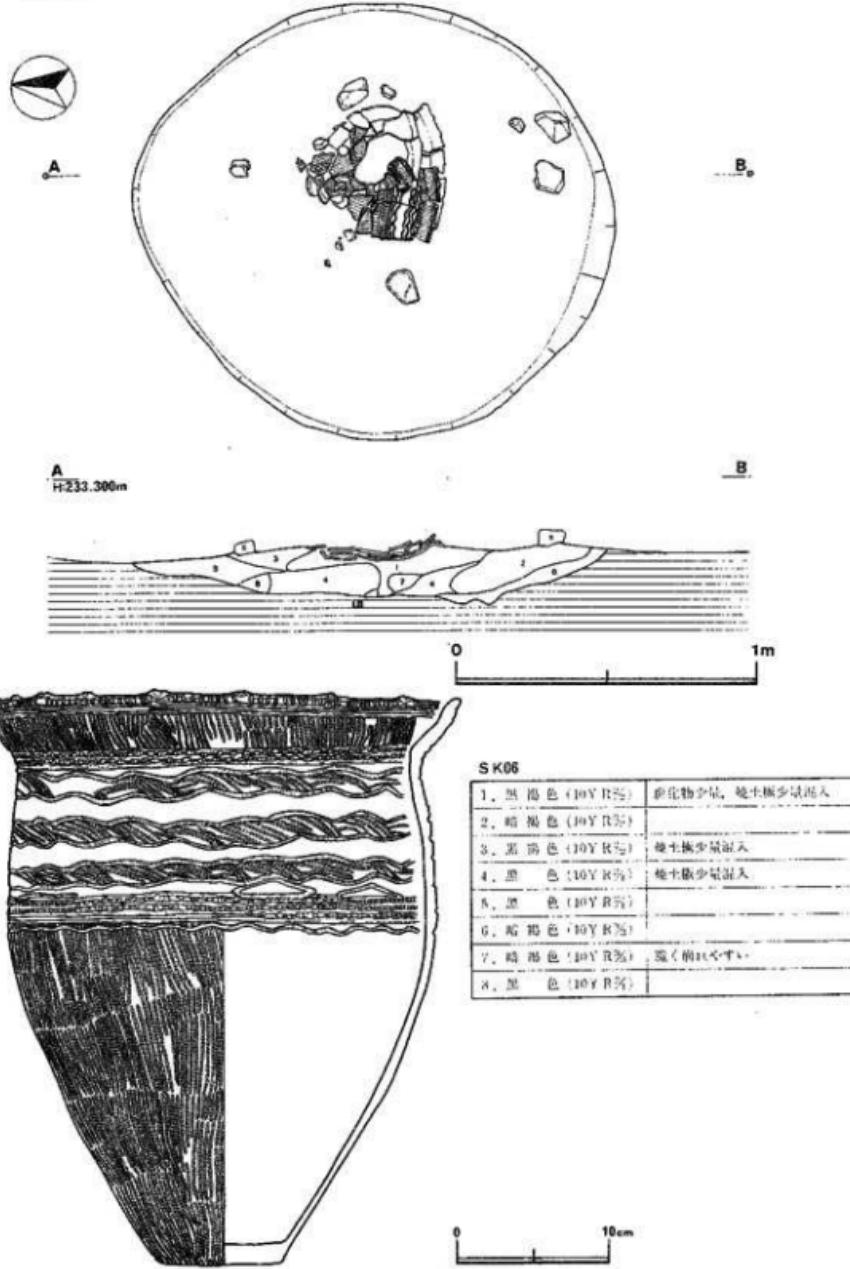
S K06 土壙 (第58図、図版44、46)

調査区中央部や北寄り、K F71グリッドで発見された土壙である。同グリッドの第4層暗褐色土を掘り下げたところ、間もなく菱形土器が押し潰された形で発見された。弥生時代に属する土器で、しかも完形品であったものが割れたと思われる状況にあったため、周囲を精査したところ直径約1.5mの円形を呈する土壙であることが判明した。土器は口縁をほぼ真南にして中央やや東寄りに横たわっており、その周囲には4~5個の径10cm前後の角礫があるが、これが特に意味のあるものとは考えられない。土壙の深さは土器発見面から約20cmと浅く、壙底面はゆるい皿状を呈しており、それほど堅くない。埋土上部にわずかに焼土粒、炭化物が認められたが、壙内で火を焚いたものとは思われなかった。また埋土中に副葬遺物的なものの存在も予想されたため、慎重に掘り下げを行なったが何も出土しなかった。

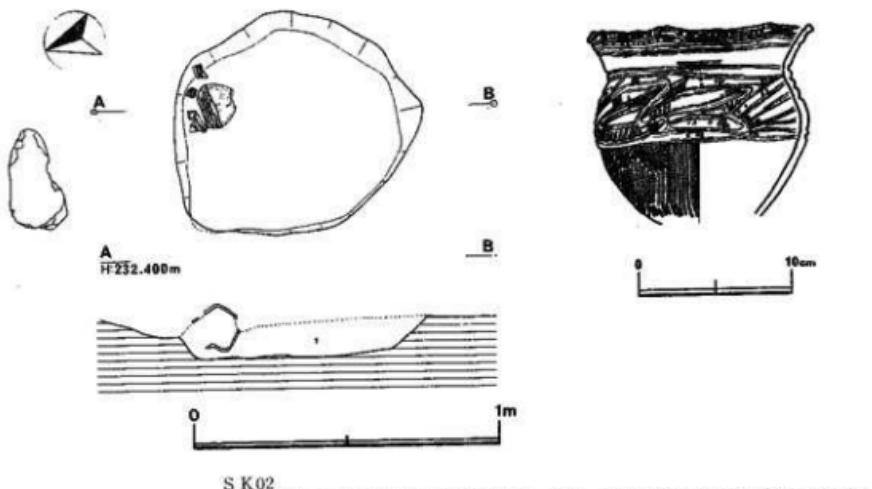
出土した遺物は、壙中央から潰れた状態で発見された土器1点のみである。この土器は、小さな底部からゆっくりとした曲線を描いて頸部に至る倒卵形の胴部に、内湾気味に開く口頸部が付いた菱形土器である。器高38cm、口径31cm、底径8cmを計る。口縁には小さな山形の突起が付され、このため波状を呈する。文様帶は口頸部、胴部上半にあり、それぞれの下限は3~4条の平行沈線と条間を埋める竹管による刺突列によって区画される。口頸部文様帶は上から、竹管による縱位の刺み、2条の平行沈線、縱位の縦文の配列で施文され、口縁の突起部の下には竹管が不規則に刺突されている。胴部文様帶には2条一対の連弧文帯が3段施され、連弧文帯の中には横走一斜行する縦文で埋められている。この対になる連弧文の上と下の弧は2程度ずれるように描かれており、連弧文帯と連弧文帯の間は磨消によって無文化している。胴部文様帶の下限は頸部と同様の平行沈線と沈線間を埋める刺突列であるが、平行沈線は4条で、このため刺突列は一部で3段となっている。胴部中位以下には胴部文様帶に接続する形での連弧文と、縱位の縦文が施されている。縦文は単節のRL縦文である。この菱形土器は弥生時代中期後葉に属するものと思われる。

S K02 土壙 (第59図、図版45、46)

S K06七壙の南南西90m、L G52グリッドで確認された土壙である。この部分では、大湯軒石層の下に3m×2mの風倒木痕を認めていたがこれも含めて、第6層漸移層直上まで掘り下けたところ、その中央部分から弥生時代の台付鉢形土器が単独で発見された。周囲を精査した結果、この台付鉢形土器は径0.7mの円形を呈する土壙の北端部に口縁を北にして横たわっていることが判明した。この土壙は風倒木痕を掘り込んで構築されているため埋土は地山土に似た色調を呈するが、壁面、底面とも比較的しっかりしている。確認面からの深さは15cm前後と浅いが、構築時には35~40cmあったものと考えられる。土壙の北0.5mに、土壙確認面よりも



第58図 SK06土壤(塞)と出土土器



1. 黄褐色（10Y R%）炭化物粒少量、燒土、歛少量混入全体的に粗くボソボソ

第59図 S K02土壙(墓)と出土土器

20~25cm程浮いた状態で30cm×15cmのやや扁平な角礫が横位に存在する。この角礫の面が土壤の埋り込み面と考えられるところから、何らかの関連も推察されたが、結論を出すには至らなかった。

他の副葬遺物等の存在を予想してS K06同様慎重に掘り進めたが、上記の土器以外には何も出土しなかった。この土器は、球形の胴部に、「く」の字形に外反する口頸部が付く台付鉢形土器で、台部は欠損している。口縁は波状口縁を呈し、台形状の頂部には竹管による刻みが施され、内面には口縁に沿って1条の沈線が巡る。口頸部文様帶は、口縁に沿った1条の沈線と、2条の平行沈線、それに竹管による縦位の刻文とからなり、胴部の沈線で文様帶の下限を画している。胴部文様帶は上半にあり、繩文地の上に磨消繩文手法による粗雑な波状工字文が描かれている。やはり下限を一条の沈線で画し、胴部下半にはR L単節繩文が縦位あるいは斜位に施されている。弥生時代中期中葉の土器と思われる。

2 その他の出土遺物

遺跡のほぼ全面から散発的に弥生時代の遺物が出土している。遺物の中には、図示できるような石器はなく、若干の剝片だけで、他は全て土器片である。土器は弥生時代中期~後期のもので、バラエティーに富む。

(1) 第1群土器

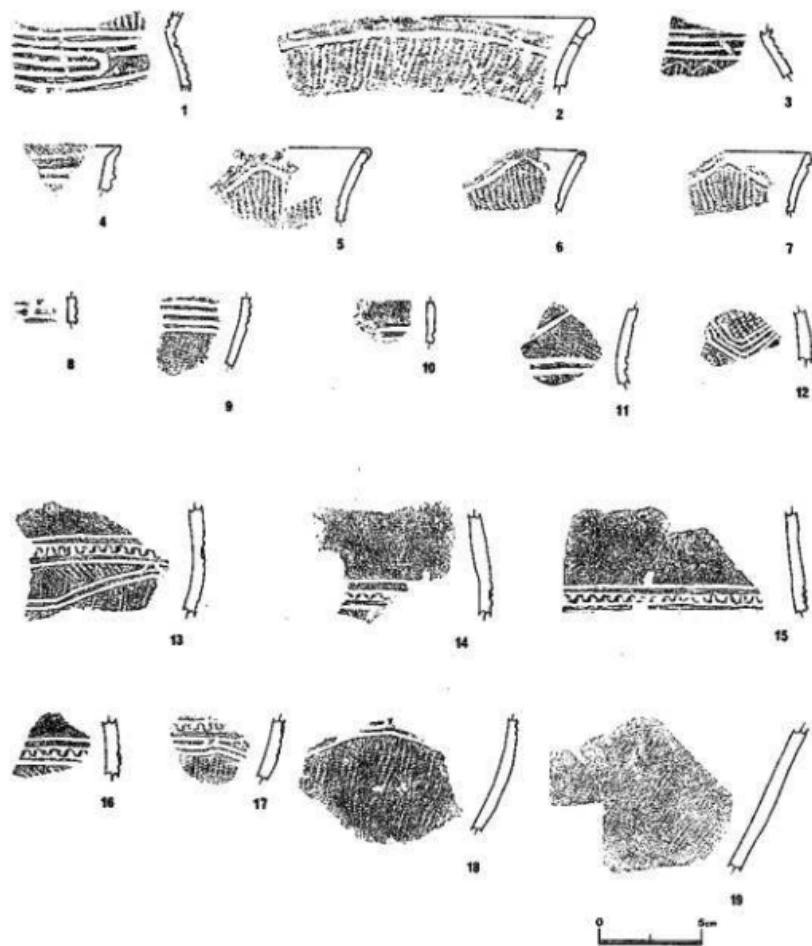
中期に属すると思われる土器群である。變形土器、鉢形土器、壺形土器がある。

第61図20、22は縄文時代晚期の土器である可能性が高いが、ここでは本群に入れた。

襲形土器（第60図1～3、5～12、61図27、28、図版47、48） 主に口頭部破片のみで完全に復元できたものはない。口頭部の形状及び、施文の違いによって4種に分類できる。①「く」の字形に外反する口頭部に丸味のある胴部の付くものである。60図1がそれで、口縁部外面には縦位のR L縄文、内面に2条の平行沈線、胴部上半に工字文が施されている。②頭部が直立して口縁部が大きく外反するいわゆる長頸襲形土器と思われるもので、60図5～10がこれにあたる。5～10は同一個体で、5～7が口縁部、10が頭部、8、9が胴部上半の破片である。大きく波打つ口縁の波頂には短い粘土紐が付され、その上から3条の押圧が加えられている。文様は平行沈線文と縦位のR L単節縄文による。頭部内面に2条の平行沈線がめぐっている。全体に薄手で焼成良好。③丸味を持つ胴部に、外反する口頭部の付く襲形土器である。61図27、60図2、3、11、12がこれで、2、3は同一個体である。27、2、3と平口縁で地文に縦位のR L単節文が用いられている。27は口縁部、胴部上半ともに平行沈線と連続山形文が施され、胴部上半の沈線間には竹管による右横位からの刺突列が2段配されている。2、3では27に見られる口縁部の連続山形文と、胴部上半の刺突列がない。27、2、3は28と同じ胎土で焼成は普通全体に赤褐色を呈する。④61図28がこれで、丸味を持つ胴部に直立気味の口頭部の付く、短頸襲形土器である。平口縁で口縁部外面は剥落して不明であるが、全面にR L単節縄文が縦位に施され、頭部にのみ2段の刺突列が配されている。この刺突列は棒状工具による左方向からのものである。

鉢形土器（第61図21、23、24、26、図版48） やや丸味のある胴部で、口頭部がわずかに外反するもの（21、24、26）と内反するもの（23）がある。21は台付の鉢形土器であるが、他は台が付くか否か明確でない。口縁部は全て波状を呈するが、頂部が山形状のもの（21、23、24）と、そうでないものがある。文様帶は胴部上半より上にあり、平行沈線文を主体として、磨消繩文手法が用いられている。21、23、24は、胴部上半に2～4条の平行沈線が施され、沈線上の数ヶ所には、1～2個の粘土紐が貼付されている。口縁部には胴部下半と同じ縦位あるいは、斜位の単節縄文が施されている。縄文は21、24がR L、23がL Rである。26は台付のものと思われる。全面に縦位のR L単節縄文を施した後、口縁部には縦位の刻文、頭部～胴部上半には6条の平行沈線を配したものである。波状口縁の頂部には横位の刻み目がある。外面全面と内面上半には朱が付着している。口縁部内面に、21に1条、26に2条の沈線が回繞されている。

壺形土器（第61図25、図版48） 25は、球形に近い胴部に直立する短い頭の付く壺形土器である。平口縁で口縁部は無文。頭部に1条の沈線が回繞する。胴部にはL R単節縄文が横位に施されている。

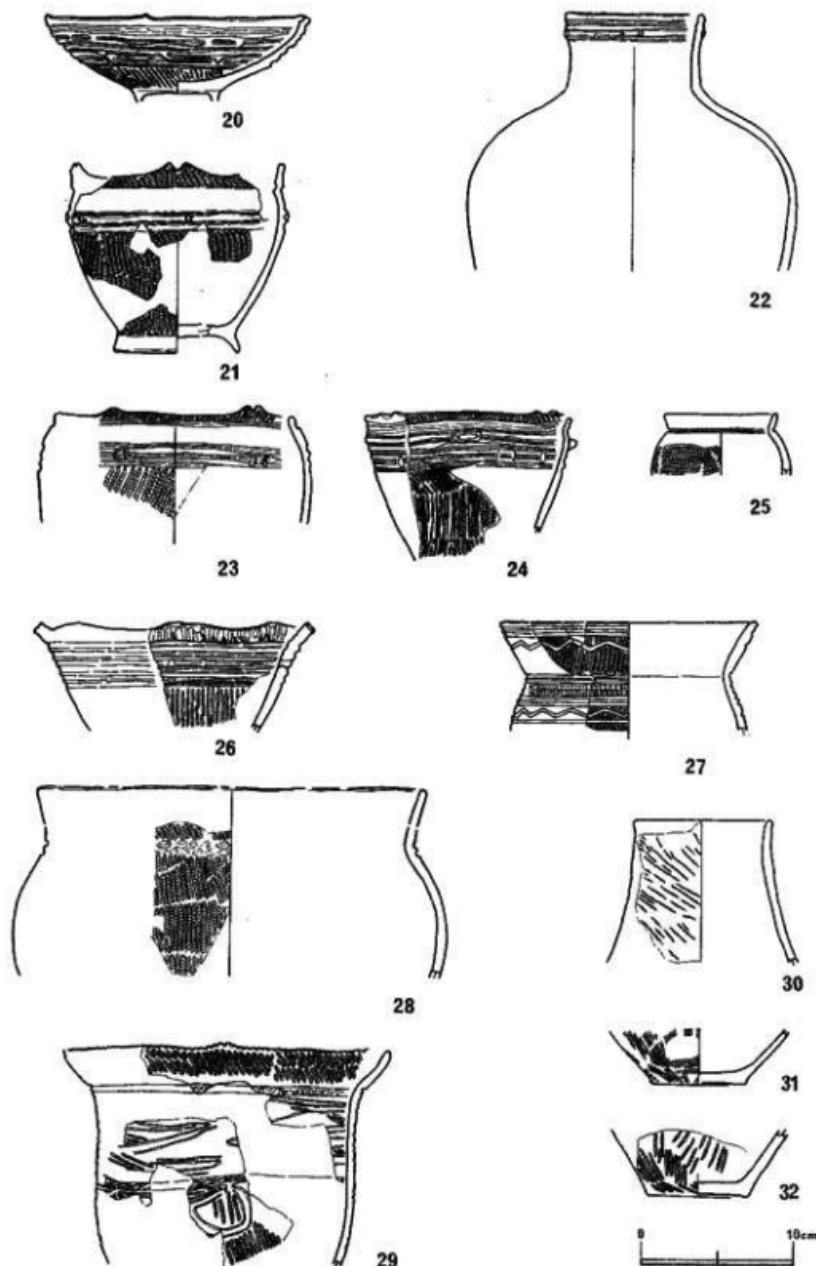


第60図 弥生時代1・2類土器 第I群土器 第II群 I類土器

第2群土器

弥生時代後期に属すると思われる土器群である。文様には交互刺突文、撚糸文、ごく粗雑な沈線文などがある。

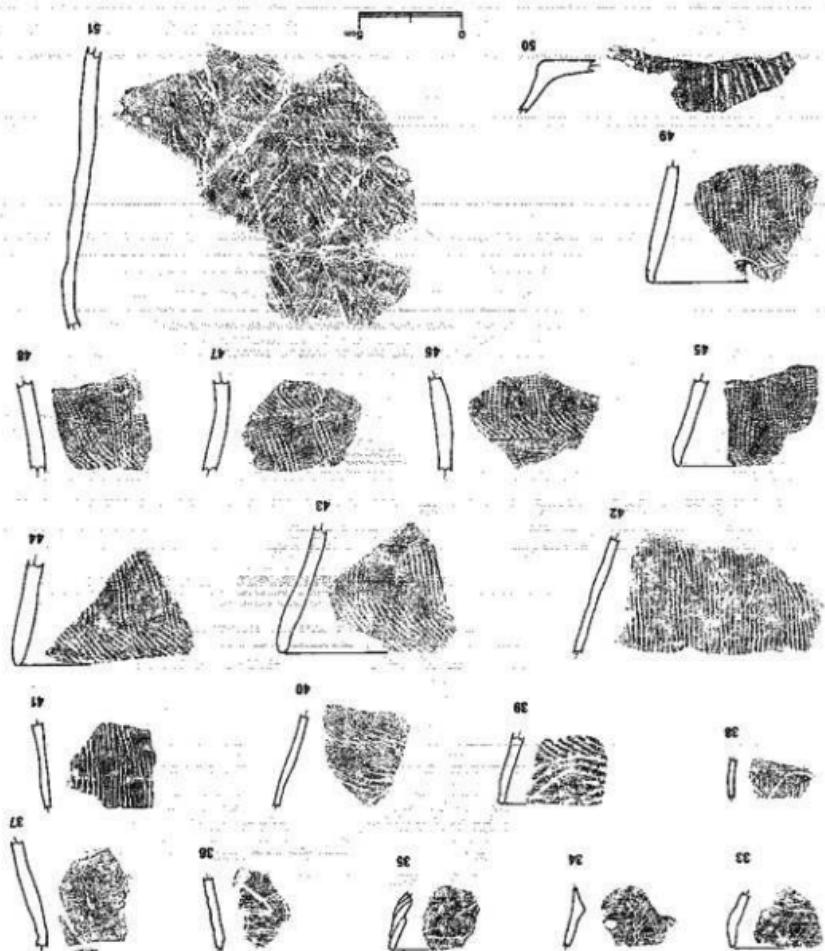
第1類土器（第60図13～19、61図29、図版47、48） 交互刺突文の施された仲間である。甕形土器がある。

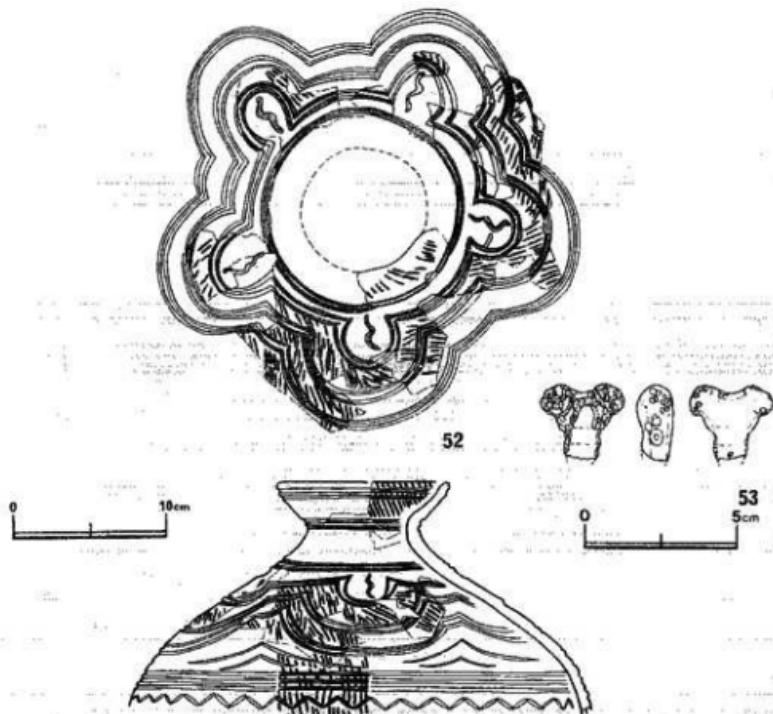


第61図 弥生時代の土器(1)

的单面器或双面器都有可能。下端的刃部比上端的刃部更直，而上端的刃部比下端的刃部更弯曲。制器工具为先端无槽的石锤或石砧，部位在刃部的上部或中部，打击方向为自刃部向后，部分的刃部起作用。下端部分的刃部比上端部分的刃部更直，而上端部分的刃部比下端部分的刃部更弯曲。制器工具为先端无槽的石锤或石砧，部位在刃部的上部或中部，打击方向为自刃部向后，部分的刃部起作用。下端部分的刃部比上端部分的刃部更直，而上端部分的刃部比下端部分的刃部更弯曲。

第62图 原生时代、3期土器





第63図 弥生時代の土器(2) 把手

施されている。胴部下半は縦位の単節繩文。胎土には砂粒を含み、焼成不良である。内外面ともに煤状炭化物の付着が著しい。第60図13~19は大型の壺形土器の胴部下半の破片とも思われるが、器外面に煤状炭化物が付着しており壺形土器とした。同一個体である。胴部最大径の部分に4条の平行沈線を回織させ、中央の条間に細い竹管による交叉刺突文を施す。上半は無文で、下には2条の平行沈線と短刻線で結ばれた三角連繩文が横走する。三角連繩文の間には斜位の撚糸文が充填されている。胴部下半は縦位の撚糸文。胎土、焼成とともに良好である。

第2類土器（第62図33~37、図版47） 粗雑な沈線文で文様を描いた仲間である。数が少なく、小破片ばかりなため器形は明確でない。

33、34は同一個体で壺形土器の口頭部破片と思われる。壺形土器であれば非常に小さな口で細長い頸の付くものかも知れない。非常に浅くて粗雑な沈線で口縁部に1条の沈線とハート形

の連続文様を描いている。35もこれに近いものと思われる。36は半截竹管で工字文風の文様、37は円形文を描いている。胎土、焼成ともにやや不良から普通。

第3類土器（第61図30～32、62図39～42、50、51、図版47） 器面のほぼ全面に撚糸文の施されたものである。器形は不明なものが多い。61図30は菱形土器の口頭部かと思われる。口縁部はほんのわずかしか残っていない。施文幅の短い撚糸文が斜位に施されている。62図39、40は口頭部破片で同一個体である。直立氣味の口縁部には撚糸压痕による菱形文風の文様、その下には斜位の撚糸文が施されている。41、42も同一個体で縱位の撚糸文である。51は撚糸文によって縱位の羽状繩文風の文様が表出されており、横位の綫縞文も見える。61図31、32、62図50は底部破片である。31の底部には4ヶ所の張り出しが作られ、このため底面は脛らみのある方形となっている。

第4類土器（第62図43～49、図版47） いわゆる帶繩文の施された仲間で、口縁部が外傾し、端部で直立氣味になる張形土器であると思われる。繩文の施文順序は、R.L原体を横位に回転施文し、その下にそれぞれ1.5cm前後の間隔を持つように縱位の繩文を施したもので、これで1段の文様帯になっている。43～48は同一個体である。49の施文方法は43～48と同じであるが、口縁部に原体の圧痕が縱位にあり、口唇部にも繩文が施されている。

第5類土器（第62図38、63図52、図版47、49） 平行沈線で連弧文及び「U」字文が描かれたもので、磨消繩文が行なわれている。62図38は連続する円形文あるいは「U」字文と浅い平行沈線が見える。63図52は球形の胴部から頸部で大きくすぼまり、短い口縁部が内湾氣味に大きく開く壺形土器である。平口縁であるが、数ヶ所に小さな突起が付く。口縁部から胴部上端では3単位の平行沈線が回繞され、口縁部には内外面ともに繩文が縱位に施されている。主文様帯は胴部上半にある。3単位の平行沈線で連弧文が、花弁状に描かれ、このうち5ヶ所では「U」字形文となっている。U字形文の中には四分体符状の無沈線が施される。これらの沈線間には單節繩文が充填されるが、磨消繩文手法によって一部無文化している。文様帯の下端は3条の平行沈線と連続山形文で画される。胴部下半には縱位のR.L.單節繩文が施されている。この土器の胴部最大径は30cm強で、直径7.5cmの底部も出土しているが、うまく接合しない。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は普通である。

把手（第63図53、図版49） 動物の頭部を装飾化したような小さな把手が1点出土している。猪であろうか。丸い耳と顔面が描かれていたように見えるが、その部分は剥落している。表面には先端の尖った棒状工具による刺突が全面に施され、側面から焼成前に小孔が穿たれている。首のところで折れているが、この部分の断面は直径約1cmの円形を呈する。

第3章 まとめ

大倍Ⅰ遺跡は小坂川の右岸、標高231~235mの段丘(関上面)上にある。この段丘面は、これまで大谷地環状列石、寺の沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、小坂環状列石墳墓など多くの遺跡、遺物の発見されて来た段丘面とは小坂川をはさんで東西に對峙する位置にあり、それだけに調査成果が期待されていた。しかし、合計18,624m²の発掘調査面積の割には発見された遺構は縄文時代堅穴住居跡3軒、土壙16基、Tピット2基、井戸状遺構2基、焼土20ヶ所、弥生時代土壙2基と少ない。また、遺物も縄文時代前期から弥生時代後期にわたって出土したが、散発的な出方であった。このように遺構、遺物の少なかった理由としては、今回の調査対象区が段丘西端部であり当該時期の生活の中心的な場ではなかったということが考えられる。現に、この段丘の東側に張り出した舌状台地に近いところからは比較的多くの遺物が出土し、南端の舌状台地部分にある大倍Ⅳ遺跡からは縄文時代前期の遺構、遺物が多く発見されている。^(註1)しかしながら、今回の調査は細長い台地の西半分を発掘したものであり、そこに残された古代人たちの土地利用、占地のあり方を考える上で貴重な資料になったものと言える。

このように少ない遺構、遺物ではあるが、その中のいくつかの遺構、遺物について以下にまとめてみたい。

1 土器横置石圓炉について

S I .01は縄文時代後期初頭に属すると思われる堅穴住居跡である。しかし炉だけの確認で、全体のプラン等は不明である。この炉は基本的には石圓炉であるが、炉の一部に土器が用いられている。つまり、長径10~30cmの扁平な河原石9個を立て並べて、直径約0.7mの円形石圓炉としたものであるが、炉の南東隅で石と石の間があいており、ここに二重の粗製深鉢形土器が口縁を炉の内側に向けて横位に置かれているものである。炉石の内側は強い熱を受けて赤化し、土器もその周囲とともによく焼けている。この深鉢形土器は正立あるいは斜位になっていたものが倒れたり、偶然にこの場に落したものではない。このように、石圓炉の一部に深鉢形土器を横位に用いる例はこれまで県内で発見されたことはなく、わずかに岩手県都南村湯沢遺跡に類似を見ることができる。^(註3)しかしながら湯沢遺跡のそれは、〈石組形斜位土器埋設炉…円形の石組の一端に土器を斜めに埋設したもの〉で、本遺跡例とは若干異なる。その時期も中期大木10Ⅱ~Ⅲ期で、本遺跡例よりもわずかに先行する。また、このS I .01の炉が本遺跡後期初頭の炉の形態として一般的なものであったかどうかかも不明であり、これとほぼ同時期と見られるS I .03の炉には土器は用いられていない。いずれにしろ、たった1例ではあるが湯沢遺跡に見られる〈石組形斜位土器埋設炉〉と何らかの関連が窺える例であり、今後の資料の増加等を

待ちたい。

2 多目的礫器について

これまで一般的には凹石、磨石、擦石、敲石などという名称で呼ばれていた石器群に対して、1つの個体で複数の機能を有していたと考えられるものが多いことから、これらを多目的礫器とした。これまでには、例えば凹石に磨いたり、擦ったりした痕がある場合、これを凹石の転用ということで処理して来たことが多い。これに対して、ここでは1つの礫器が最初からいくつかの機能を持つものとして用いられたと考えたのである。そのいくつかの機能を考える場合、残された痕跡が、使用された（機能した）結果としての痕跡か、これから使用するために剥離あるいは成形された痕跡であるのかが問題となる。本石器にあっては、主に3種の痕跡を認めることができる。^(註5) ①=凹み、②=ゴツゴツあるいはボツボツした面、③=ツルツルした面である。この中には、例えば①=凹みの場合、ごく痕跡程度のものと、深いもの、その中間くらいのものとがあり、いずれも使用された結果として残った痕であると考えるのが、妥当である。このことは、②、③でも同様である。それでは一体、これら①、②、③はどのような使用及び機能の結果生じたものであろうか。ここでは、その裏付けとなるような実験などは一齊行っておらず、その論拠が弱いという説はまぬがれないが、一応以下のように推論した。^(註6) ①=凹み→モノを敲いた痕と思われる。この凹みが形成される場合、1回の打撃だけで大きく剥れることはなく、それは直径1~3mm、深さ1mm程度のことが多いようだ。このような打撃がほぼ同一の部分にくり返しきり返し行なわれた結果、大きな凹みができる。モノの特定はむづかしく否定的な実験データもあるが、クルミの尖った方を台石などの上で叩いたのではなかろうか。^(註7) ②=ゴツゴツあるいはボツボツした面→モノを台石（石皿）の上で漬した痕と思われる。上下両端の痕跡は若干異なるが、両側辺の平坦に近い面は有擦痕打製石器の側面に見られる状態と非常に良く似ている。有擦痕打製石器の場合、両面から打ち欠かれた後に平坦でボツボツした面が形成されたのに対し、多目的礫器では両面からの打ち欠き痕ではなく、自然面が使用の結果このような面になったものと思われる。③=ツルツルの面→台石などの上でモノをスッタした痕と思われる。

これら①、②、③の痕跡のできるような使用は恐らくは片手で握った状態での使用であろう。石器の大きさも片手で握ってちょうどしきりする程度である。このように見てくると、これら①、②、③の痕跡はいずれも調理に関した一連の使用の結果生じたもののように思えてくる。そして、その対象となるモノは恐らくは堅果類ではあるまいか。使用痕だけからの推論ではあるが、今までの段階ではこのように考えておきたい。

3 弥生時代の土墻について

S K 06, 02, 2基の弥生時代の土墻が発見されている。両者は約90m離れており、その東側を

除く周囲からは他の弥生時代の遺構、遺物は検出されなかった。2基の土壙は、その規模、土器の出土状況に差異はあるものの、平面形が円形で、それぞれ完形あるいはほぼ完形の土器が1個ずつ出土するという点では共通している。つまり、SK06は直径1.5mの円形を呈し、その中央部の埋土中から完形の菱形土器が横倒しの潰れた状態で出土した。またSK02は、径約0.75mの円形で、北端部から（古付）鉢形土器が横倒しの形で出土した。両土壙は壁・底面とも明確ではあるが、踏みかためられたような堅さではなく、埋土は人為的に埋められた状況を呈している。このような弥生時代の土壙は、これまで県内では発見された例がない。岩手県では宇鉄II遺跡、垂柳遺跡、瀬野遺跡などに類似する土壙が見られる。しかしながら、それらの遺跡で発見されている土壙は、楕円形が主体である。宇鉄II遺跡ではその中から土器の他、菅玉、勾玉、小玉、石器などが出土し、ベニカラの分布も認められ、土壙裏として把えられている。本遺跡の土壙はどのような性格の遺構と考えるべきなのであろうか。確かに現在までのところ、人骨、ベニカラ、菅玉等の副葬遺物などの検出はなく、墓とする要件は満たされていない。しかしながら、遺構の在り方、土器の出土状況などからして、これらSK06、02二基の土壙は墓壙である可能性が強いとしておきたい。なお、土壙の時期は、その出土土器からSK06は、中期後葉の田舎館式期の後半、SK02は二枚橋式～宇鉄II式期前後と思われる。

4 弥生式土器について

遺跡のほぼ全域にわたって、大湯軽石層下の第4層暗褐色土から弥生時代の遺物が出土している。これらの土器は概観するに、弥生時代中期から後期に亘っているが、その量、器種とともに少なく、断片的なものである。ここでは、それらの器形、文様などから、おおよその時期を求めてみたい。

61図21、23、24は鉢形、あるいは台付鉢形土器である。突起状のゆるい波状口縁、無文の頸部、胴部上半の結節沈線文などから、中期前葉の砂汎式～二枚橋式期に属するものと思われる。

61図26、SK02出土土器、60図5～10は鉢形土器あるいは菱形土器である。口縁部に施された縦位の刻目、結節沈線文、波状工字文などから中期中葉の二枚橋式～宇鉄II式期に入るものと思われる。

61図27、28、SK06出土土器、60図2、3は菱形土器である。胴部上半の肩部が明瞭でなく、口頭部が外反する器形、刺突列と鋸齒文のモチーフなどから中期後半の田舎館2・3群式期に相当するものであろう。

61図29、60図13～19は菱形土器あるいは壺形土器である。文様帶の上・下を限る交瓦刺突文、くずれた形の工字文、それに円形文、三角連繋文などから、基本的には後期の天王山系統の土器群と思われ、大きな意味での小坂式に入るものであろう。

61図30～32、62図33～51は口頭部がそれほど外反しない菱形土器、あるいは内傾して太くや

や長い頭を持つ整形土器と思われる。ごく浅く頬り気のない沈線文、細い燃糸文、帶縦文など（註12）の主文様は種々の要素が混じり合ったもののように見えるが、後期後半の小坂X式あるいは（註13）本松式期の土器群と思われる。

62図52の整形土器は、これまで小坂町周辺では知られていなかった土器である。口頭部、底部に比べて腹部最大径が非常に大きな器形を呈する。主文様は磨消繩文手法を用いた沈線による連弧文に近いもの、U字文、連續山形文（あるいは波状沈線文）などである。このような連弧文あるいは連續山形文の退化した文様、円形文あるいはU字文はこれまでのところ岩手県一本松遺跡などで見られるという。やはり後期終末期の土器であろう。

以上、今回の大岱I遺跡で出土した弥生式土器の時期を述べたわけであるが、これらは層位的な裏付けがあるものではなく、また共作というものでもない。また、SK06出土土器などには恵山式後半の影響もあるやに思えるが、今回の調査では明確な北海道系の土器は出土しなかった。

以上、今回の大岱I遺跡の発掘調査結果についてまとめてみた。この中からは、縄文時代前期から弥生時代後期に至る人々が、調査区内に立ち入ったことはわかっていても、その中で彼らがどのような意識のもとに生活したかという点については不明である。この後大岱I遺跡に隣接する大岱II、III、IV、円河原遺跡などが調査される予定である。それらの遺跡も当然のことながら彼らの生活圏の一部であったはずであり、その調査成果をも加味して、同時代の人達の暮らしぶりを明らかにして行きたいと思う。

（註1） 安保彰「小坂のあけぼの 繩文期・弥生期」 1975年

（註2） 大岱II遺跡の発掘調査は1982、83年の2ヶ年の繼續で行われ、その調査報告書は1984年刊行の予定である。

（註3） 岩手県埋蔵文化財センター「都南村湯沢遺跡」 1978年

（註4） 目黒吉明「住居の炉」『縄文文化の研究8』 雄山閣 1982年

（註5） 例えば凹石に關しては 藤森英一「凹石は何に使えるか」「井戸戸」 1965年などの実験を通しての論収がある。

（註6） 註5に同じ。

（註7） 上下両端にあるゴツゴツした面を、これが物を敲き落す目的に使用した痕跡であるとすると、④の凹みの部分とかなり似た機能であると言える。④の凹みの部分が硬くて尖ったものをたたく場合、④の上下両端の面は④の対象物よりも石器のあたる面の大きい物を敲き落す時に使用したと考え、この機能を④の中から独立させることもできると思われる。

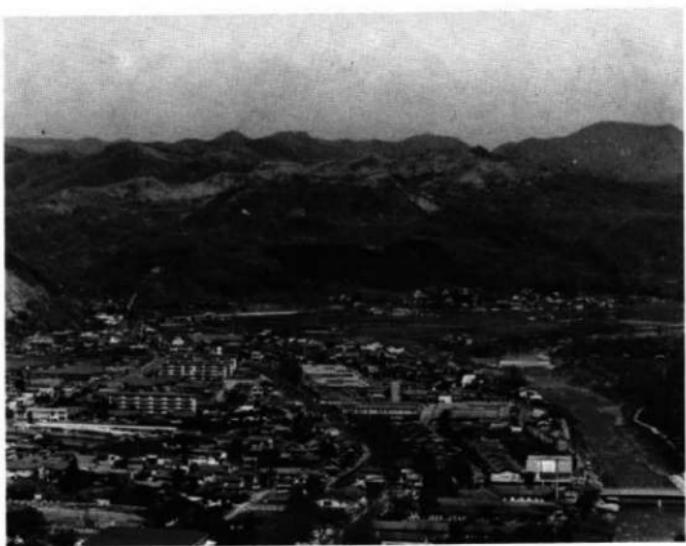
（註8） 肌森県立郷土館「宇鉄II遺跡発掘調査報告書」 1979年

- (註9) 田舎館村教育委員会『垂柳遺跡』 1982年
- (註10) 東北考古学会『湘野遺跡』 1982年
- (註11) 橋善光「弥生土器－東北・北東北3－」『考古学ジャーナル166』 1979年
- (註12) 奥山潤・安保彰「十和田湖西南部（小坂鉢山）の弥生文化とその後続形態（上・下）」『考古学雑誌』49巻2・3号 1963年
- (註13) 武田真夫「岩手県における弥生土器について－盛岡地方を主として－」『考古風土記3』 1978年
- (註14) 橋善光「弥生時代－東北・北東北4－」『考古学ジャーナル168』 1979年

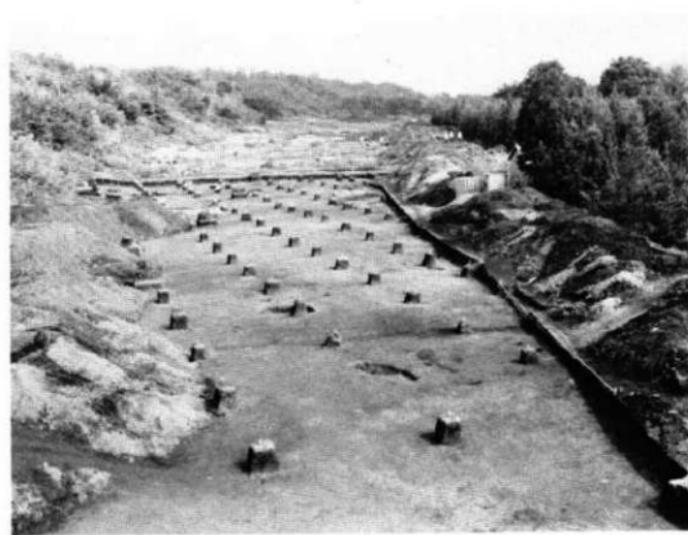
昭和57年度東北縦貫自動車道発掘調査・整理作業参加者

整理作業員 浅石悦子、池田邦子、工藤重子、安保良子、津島満子、高橋一子、上岡由美子、中川由美子、遠藤信子、庄司みづ子、須崎サツエ、前川教子、橋本英枝、川口富美子、日向レコ、大西英子、大野甲子、渡辺節子、高柳良子、藤倉寿枝、小松睦子、草野弘子、熊谷恵子、後藤のり子、菅原恵子、高橋エリ子、武田美智子、竹村純子、進藤静子、茂木マイ子、長澤麻子、安谷恭子、古脇聖、高階恵子、大河洋子、後藤正子、高柳三枝子、池田マサ子、長澤厚子、小松郁子、青森恭子、戸澤典子、田中まき子、森元てる子、高橋カツ子、原輝子、佐々木フクエ

発掘作業員 中村忠男、中村芳徳、池田兼松、川口正、成田勝次郎、吉川喜市、池田耕嗣、山本重治、銭盛秀志、日向源司、本田政旗、鶴見幸雄、高橋忠男、小畑金次郎、佐藤良藏、伊藤清次郎、高橋昭平、中村明美、高橋英志、菅原正雄、村田文栄、村松一男、杉原純、小川好美、相田篤、木村啓治、上野秀治、鈴谷芳穂、船谷泰一、工藤政七、飯島壽七、黒沢由香、木村一郎、荒川誠、龟田吉成、龟田正二、中村吉介、宮越隆義、沢田久美男、鈴木隆次郎、高野泰一郎、工藤幸一、工藤幸徳、金沢義市、多田賛治、本田善義、高齋寅、田中誠一、浜谷秀光、片平真直、山村朝嗣、近藤誠、長谷川安正、久井不正秀、子田勝行、田口俊明、三沢龍人、小堀誠、中村キサ、秋本タマ、大森サエ、川口昭子、杉原八考、古沢イチエ、中村ヨリ、杉原ヨシノ、杉原ヨシ、池田しおえ、杉原トシ、中村京子、中村潔、中村キエ、杉原ハナ、池田栄美子、和田トミ、杉原真子、中村三枝子、中村千子、池田サエ子、杉原チワ、中村カズ、中村ノブ、本田栄子、本田ハマ、本田タミ、本田カズ子、本郷京子、中村ヤエ、李田森代子、中浦リツ子、小笠原令子、沢田ヨリ子、本田泰子、本田ケイ子、山崎ミヨ、沢田幸子、伊藤江美、中村かず、松山芳子、佐藤セツ子、多田テツ、多田キヨ、木村すみ子、杉野ミキ、成田みどり、和田ミエ、和田セツ、中山敬子、鈴木英枝、小堀ミサオ、渡辺ナミ、日向タエ、成田マチエ、小西有子、園塚水子、船水フチエ、西脇キタ、川村アイ子、前川克子、組口ノリ、佐藤マサヨ、庄野博子、清水生子、岩谷成子、伊達みや子、日向イサ、安保キヤ、日向トキ、日向恵子、上野淑子、木村順子、柏谷アス子、伊藤スガ、三浦ヌイ、小野寺暁子、細川ツギ、近江セイ子、高橋キミ子、中村マリ子、熊谷誠子、浜谷ササ、小林サツ、熊谷静子、熊谷ミヨ、熊谷キエ子、小林涼子、熊谷エサ、小林キミ、熊谷ケエ子、龟田キン、船水律子、本田和子、吉田しづゑ、小笠原ヨシエ、中村さよ、沢口チエ、高山青子、齊藤恵子、小笠原サヨ、工藤ルイ子、村尾洋子、宮籠ヨシノ、成田ユキ、和田順子、和田セツ子、成田タヨ、奈良チワ、工藤ナナ子、阿部たみ、中野聰子、中村ミヤ、佐藤ハナ、田村スミ、柳田トミ、手田キミ、青岡カツ、武田キエ、日向ウメ、越後ツマ子、山村キエ、高橋カツ子、三浦テル、長内ツナ、佐藤桂子、伊藤ウメ、沢口ミナ、千葉敦子、横田ユキ、工藤久子、佐々木茂子、成田ワカ、酒井富子、鈴木静江、望月キヨ子、松谷公弥子、中島タカ子



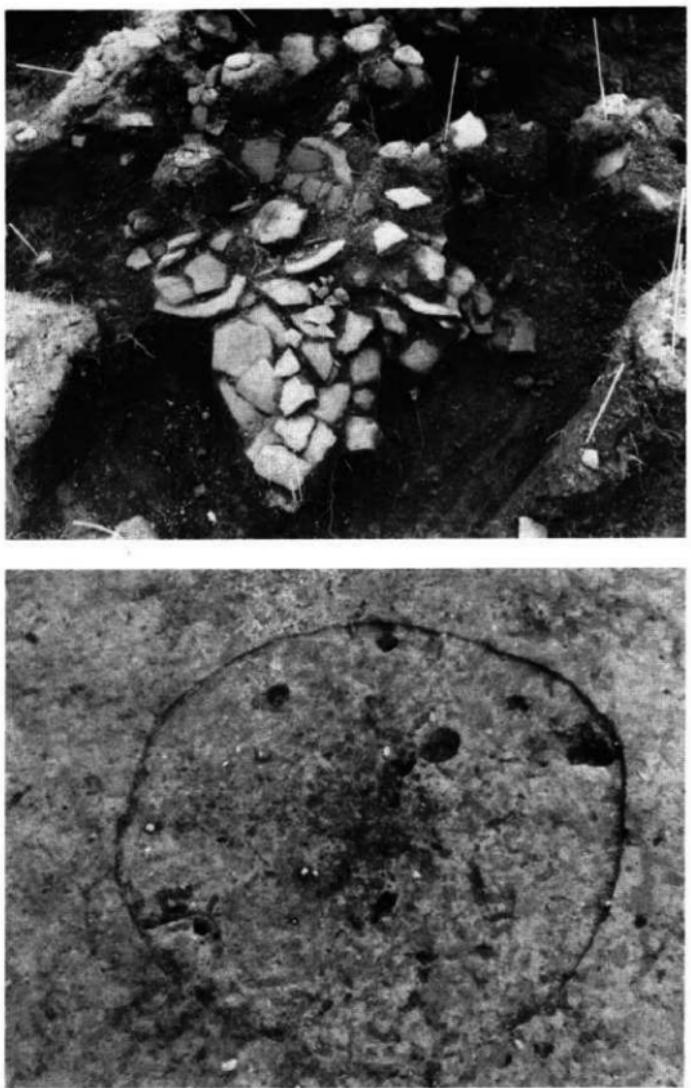
図版1 上 遺跡遠景（南東▶） 下 遺跡全景（南▶）



図版2 上 遺跡全景（南▶） 下 調査終了後（南▶）



図版3 上 調査終了後（北西▶） 下 土層断面



圖版 4 上 土器出土狀況 下 S I 31 穹穴住居跡 (北►)



圖版 5 上 S I 03 壓穴住居跡石圓爐發見狀況 (西►)

下 S I 03 壓穴住居跡 (西►)



図版 6 上 S I 01 積穴住居跡発見状況 (東▶)

下 S I 01 積穴住居跡石圓炉 (北▶)



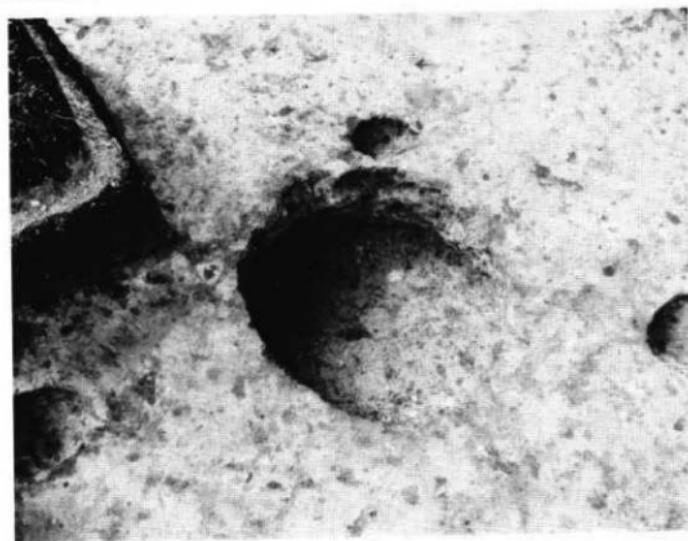
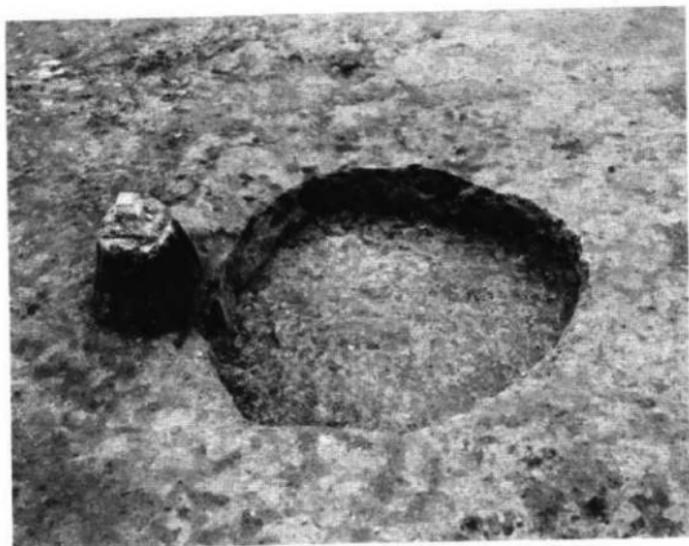
図版7 上 調査区南端部遺構群（南▶）

下 SK 04 大型円形土壙（北▶）



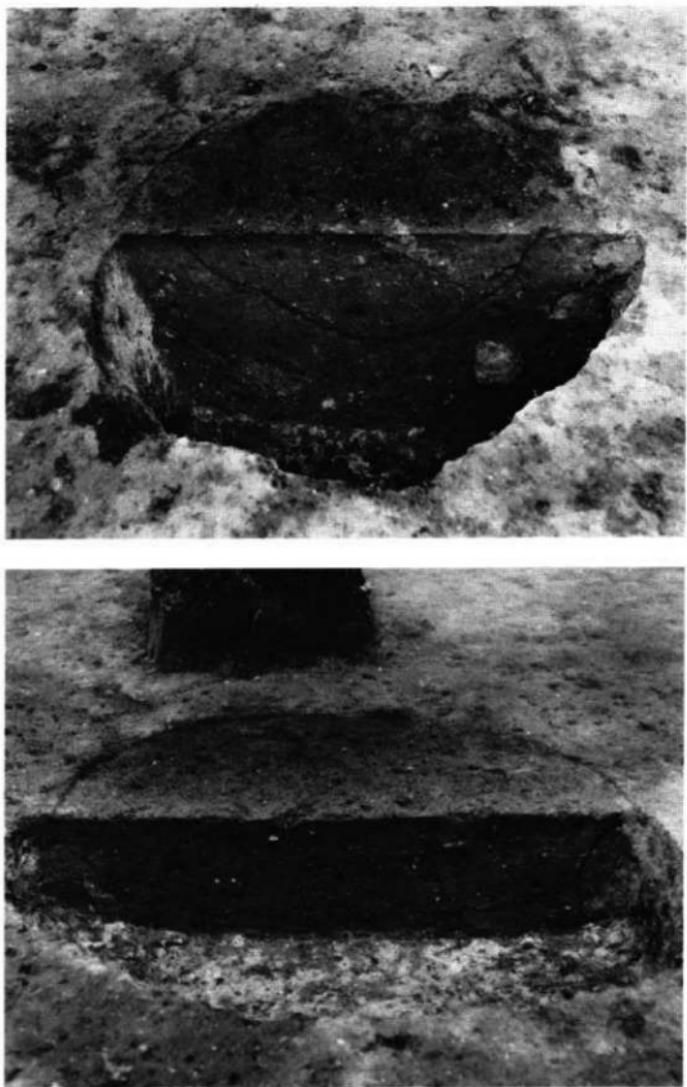
図版8 上 SK 05 土壌確認時の状況（南▶）

下 SK 05 大型円形土壌（南▶）



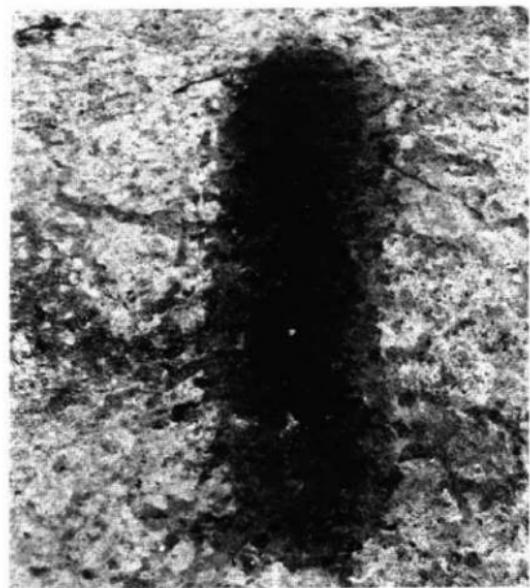
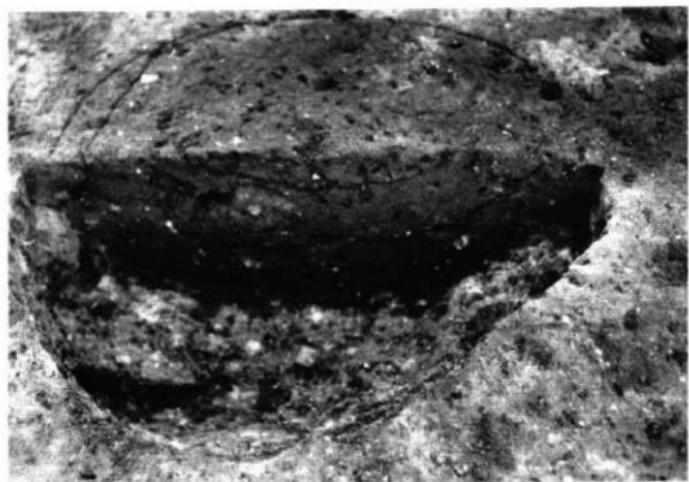
図版9 上 SK 07 大型円形土壙（東►）

下 SK 10 袋状土壙（南►）



図版10 上 SK 18 円形土壤（南▶）

下 SK 21 円形土壤（南▶）



図版11 上 SK 29 円形土壙（西▶）

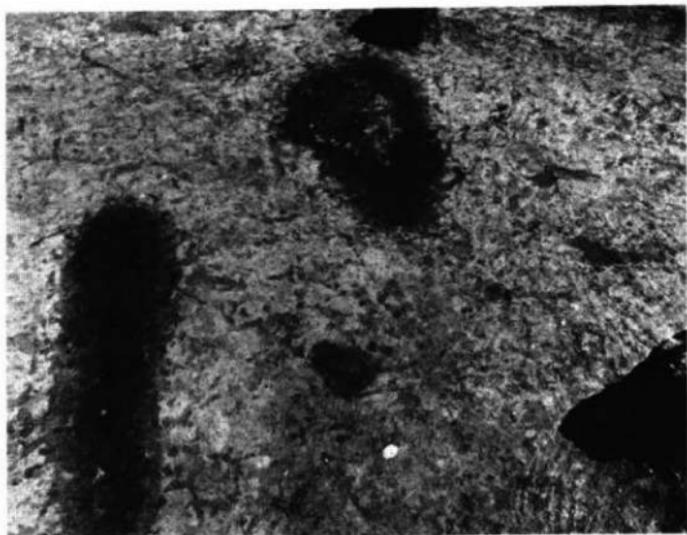
下 SKT 12 Tピット確認状況（南西▶）

図版12 上



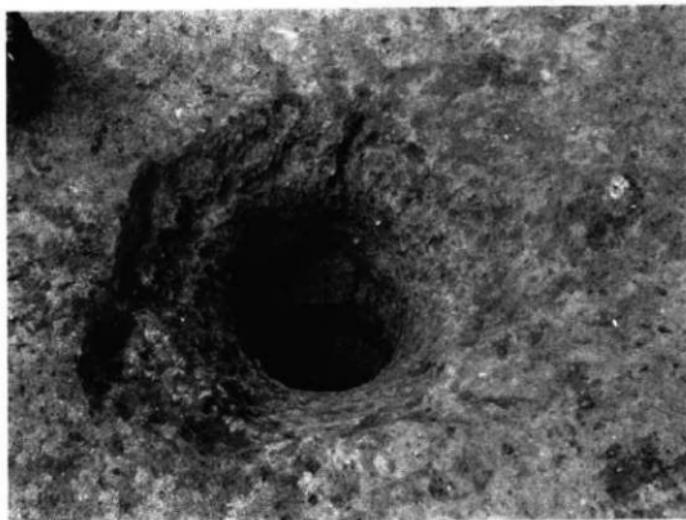
上 SKT 12 Tビット (北東▶)

下 同上 埋土の状況 (北東▶)



図版I3 上 SKT 12・13 Tピット確認状況（南西▶）

下 SKT 13 Tピット（北▶）



図版14 上 SK 09 井戸状遺構（北▶）

下 SK 14 井戸状遺構（東▶）

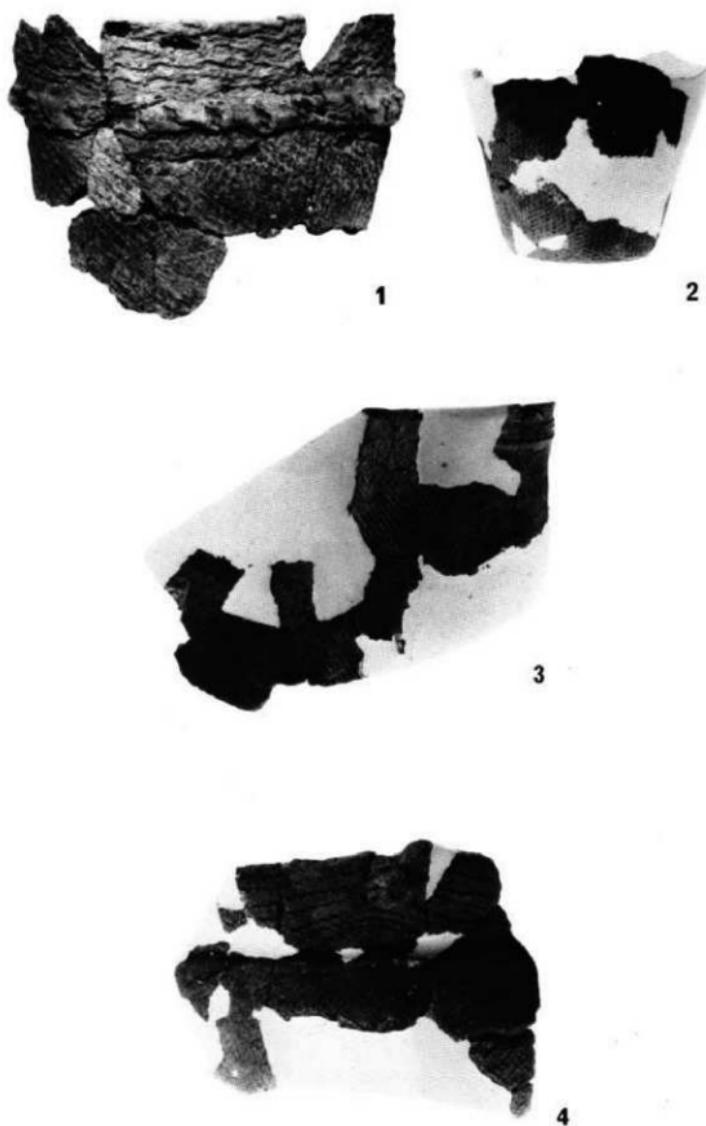


圖版15 S I 31・03・01 積穴住居跡出土遺物

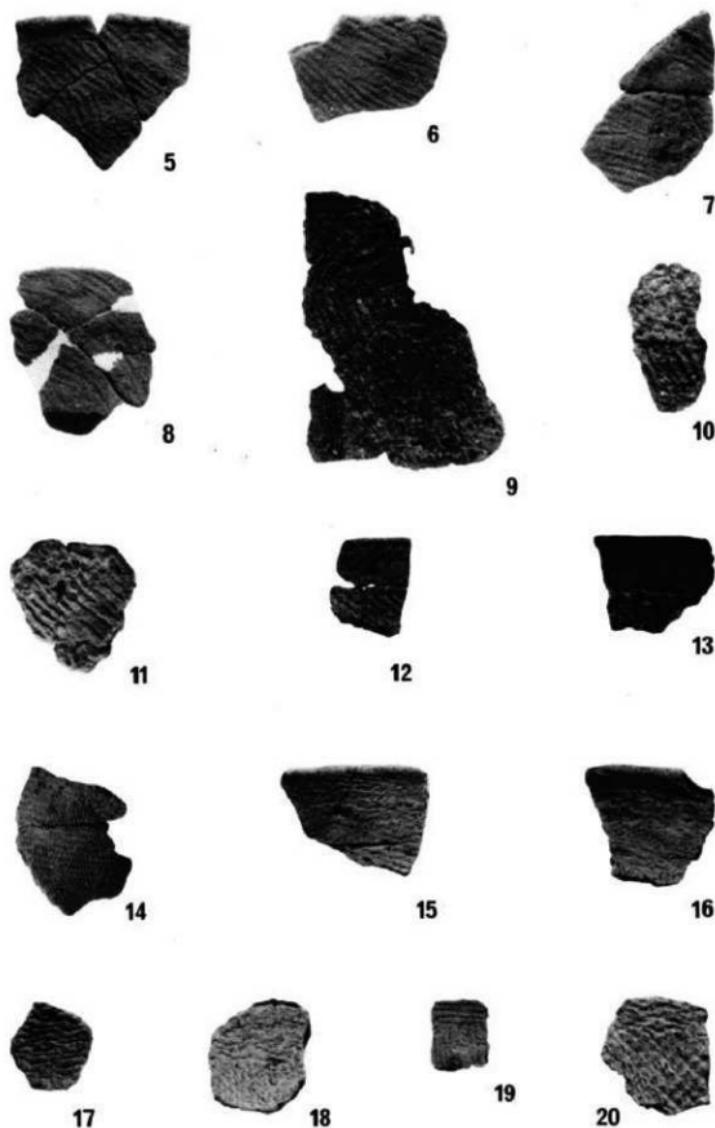


SK04

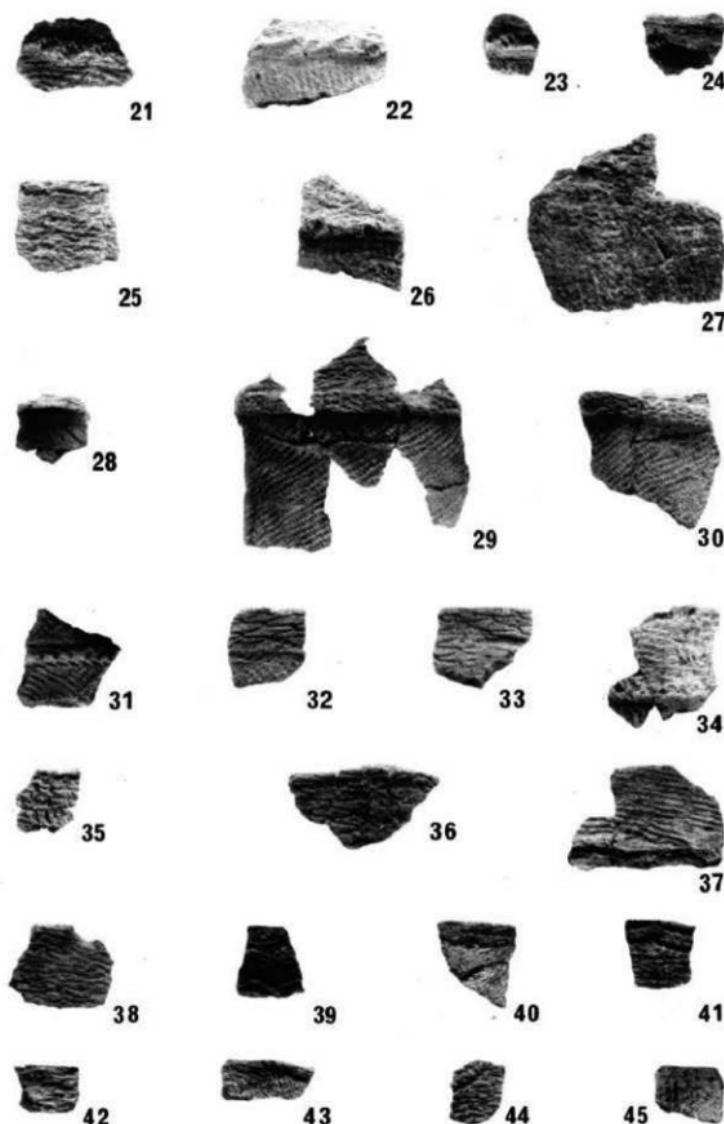




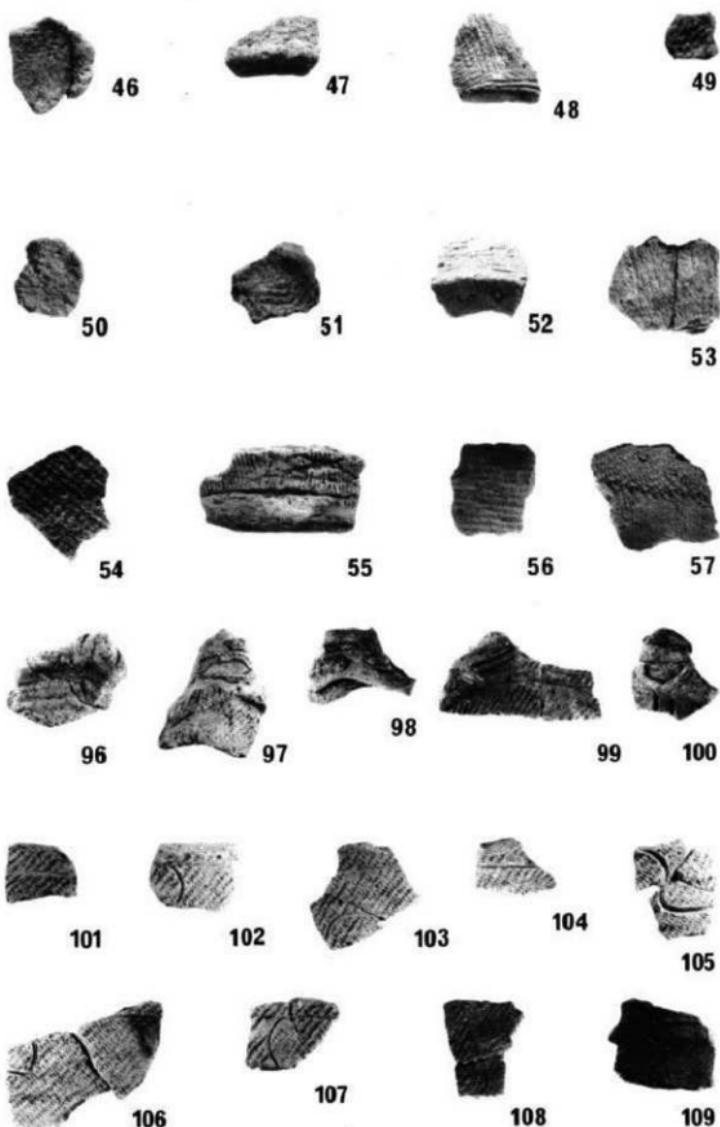
図版17 縄文時代前期の土器



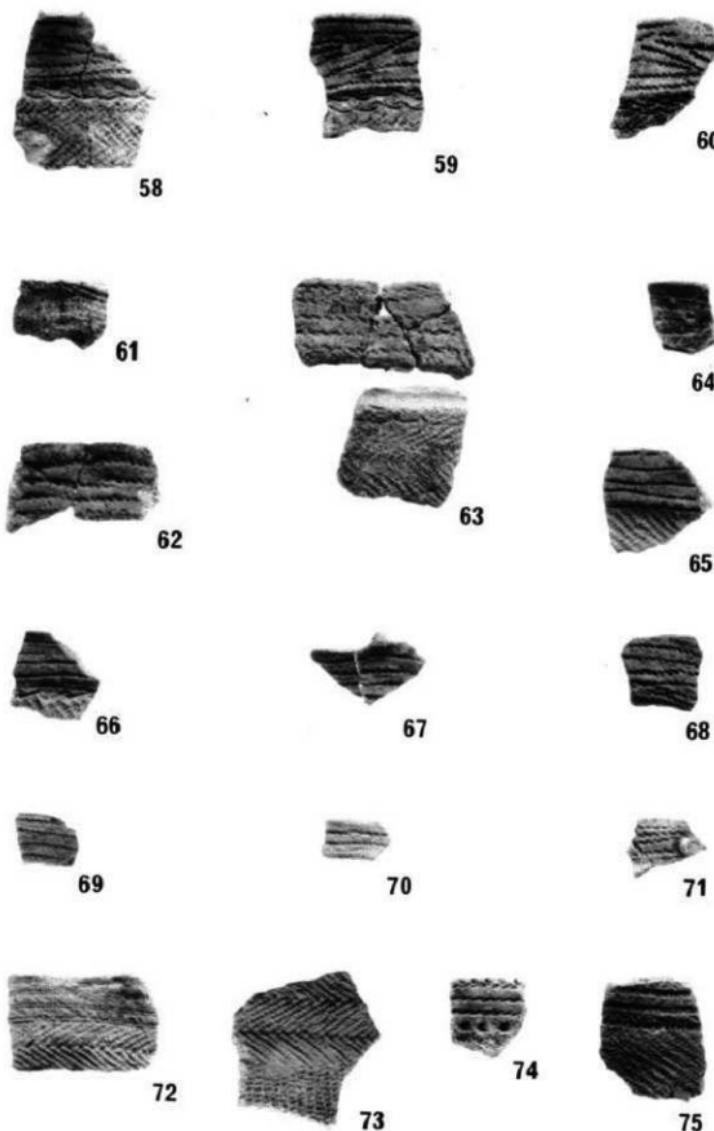
図版18 繩文時代1群1・2類土器



図版19 繩文時代I群3・4類土器

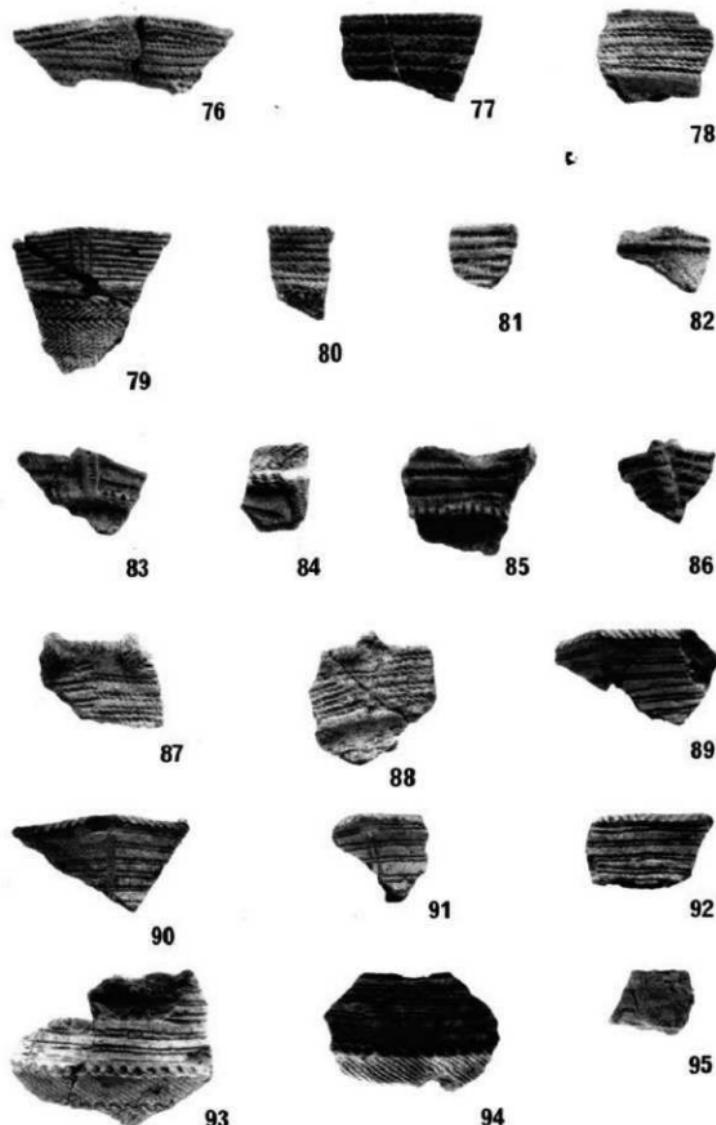


図版20 繩文時代I群5類・II群1・2類土器

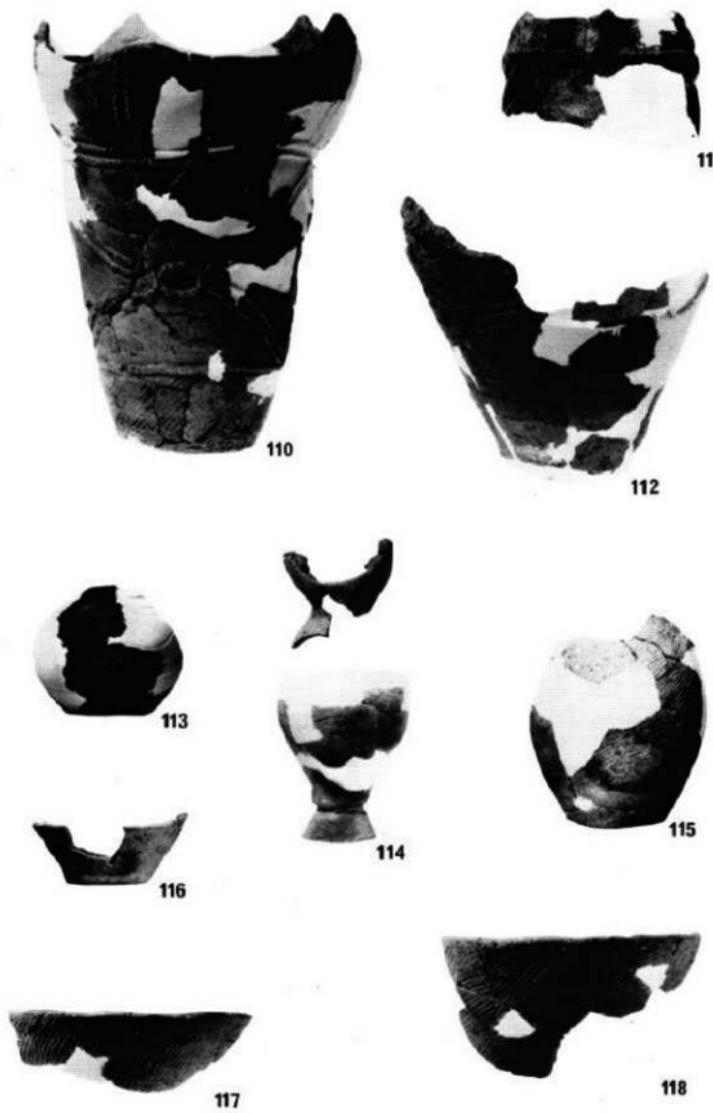


図版21 繩文時代Ⅰ群6・7類土器

大正 1 通片

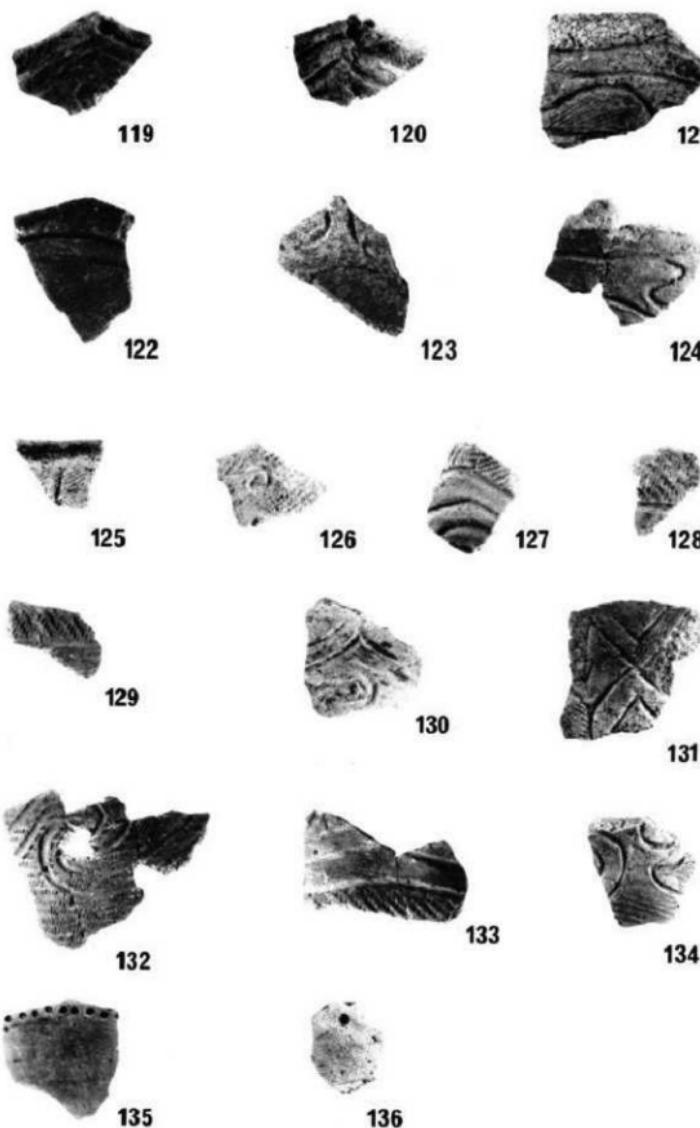


図版22 繩文時代 I 群 8・9 類土器



図版23 縄文時代中期末～後期の土器(1)

大字 I 亂跡



図版24 縄文時代 IV 群 2 類土器



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154

大倉 I 造跡



155



156



157



158



159



160



161



162



163



164



165



166



167



168



169



170

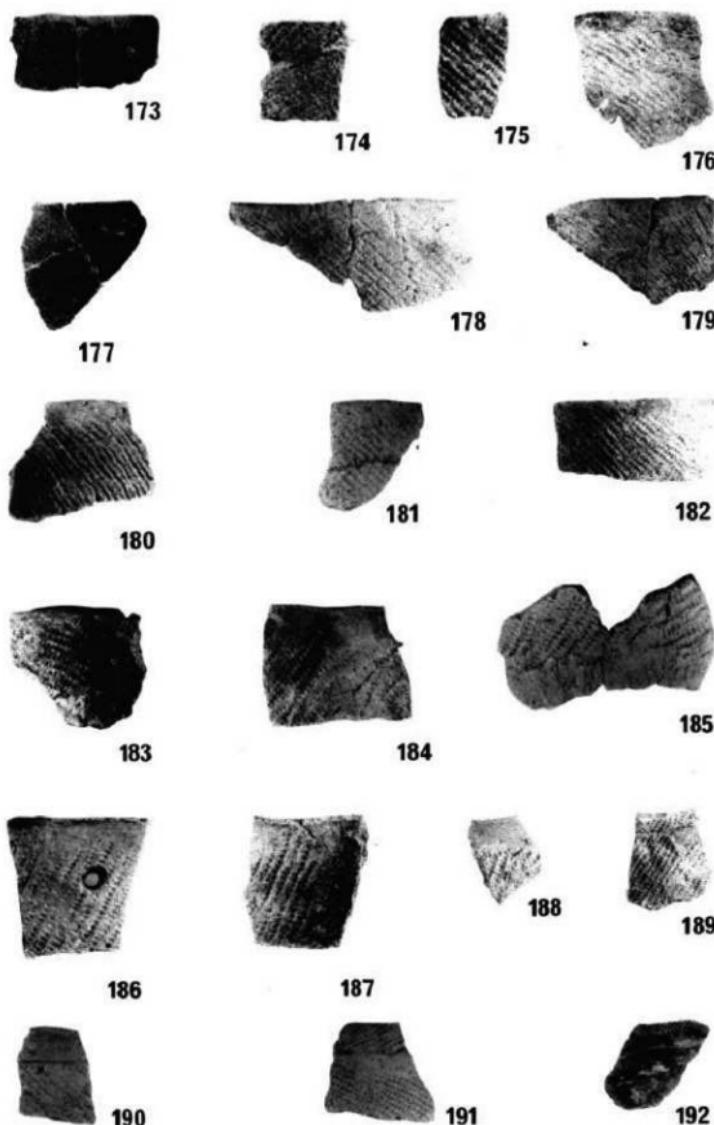


171



172

図版26 繩文時代IV群5類土器



図版27 挽文時代III群6類土器



193



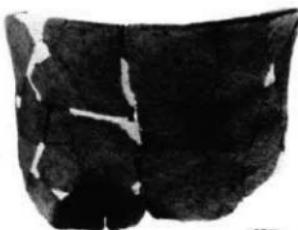
194



195



196



197



198

図版28 縄文時代後期の土器(2)



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208



209



210

図版29 繩文時代後期の土器(3)・IV群土器

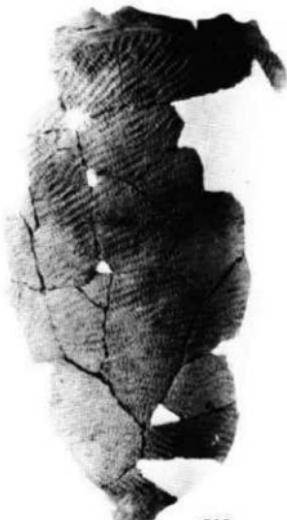
大筋：浅杯



211



212



213



214



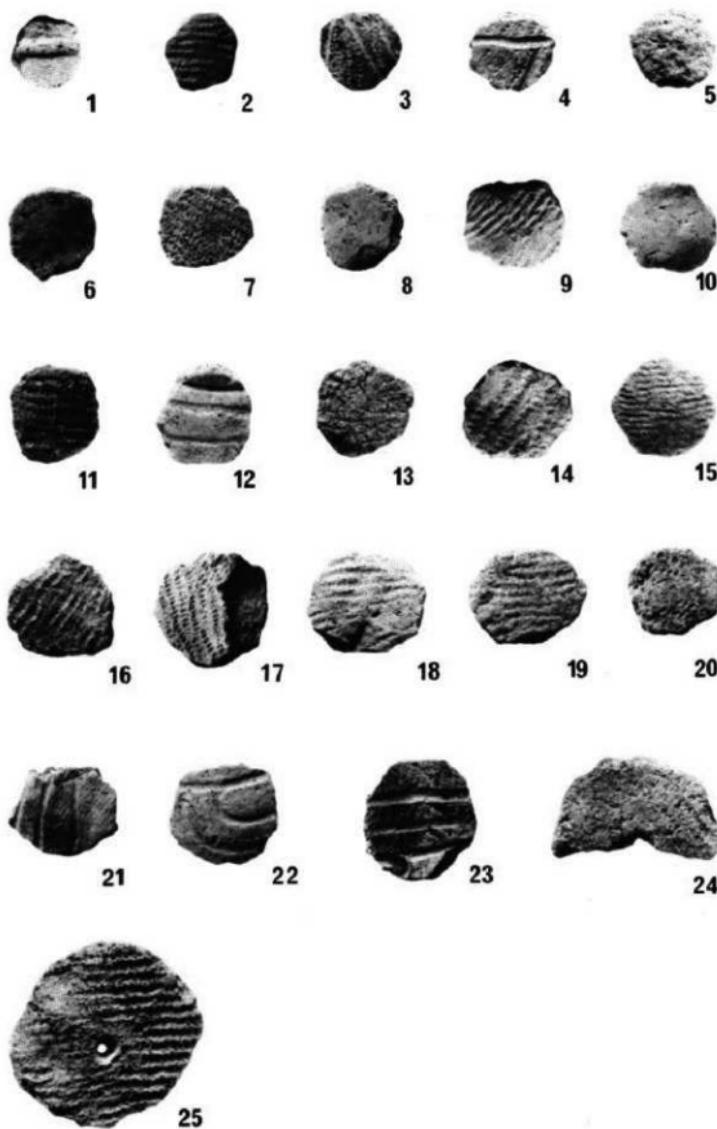
215

216

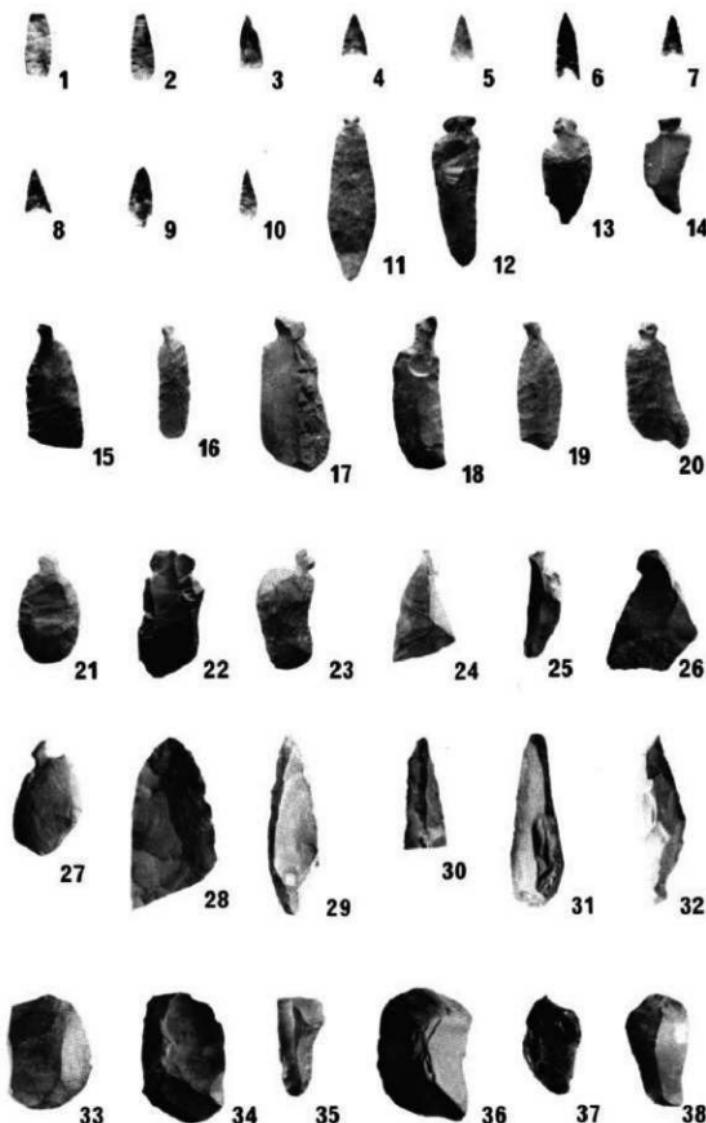


217

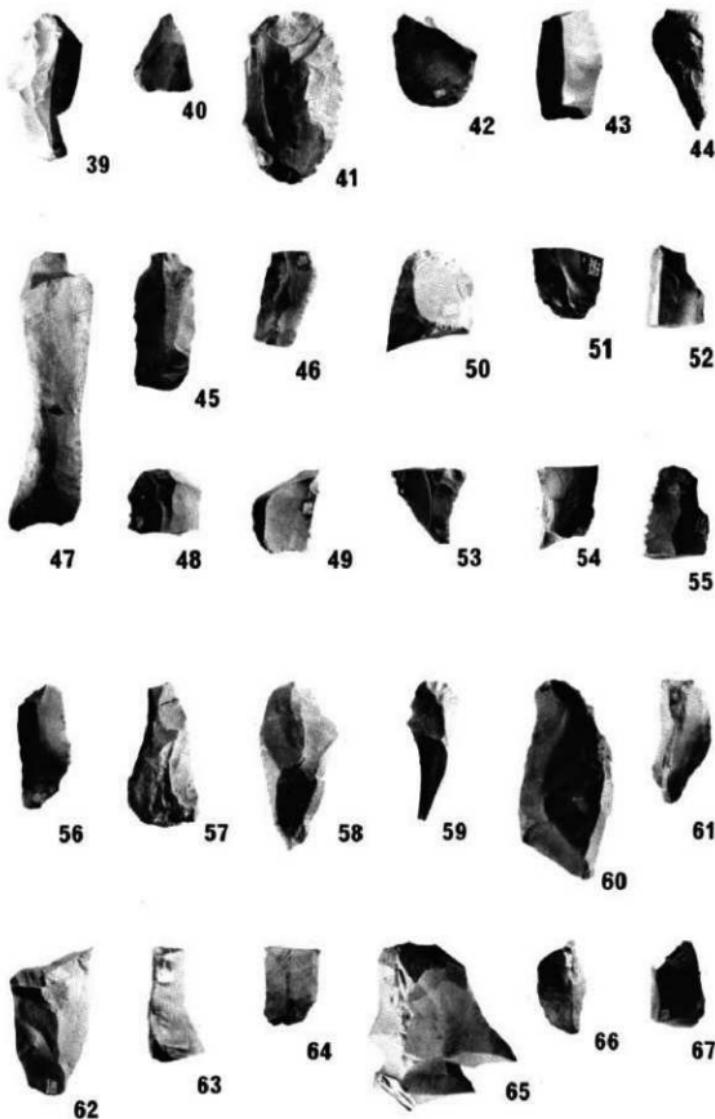
図版30 繩文時代晩期の土器



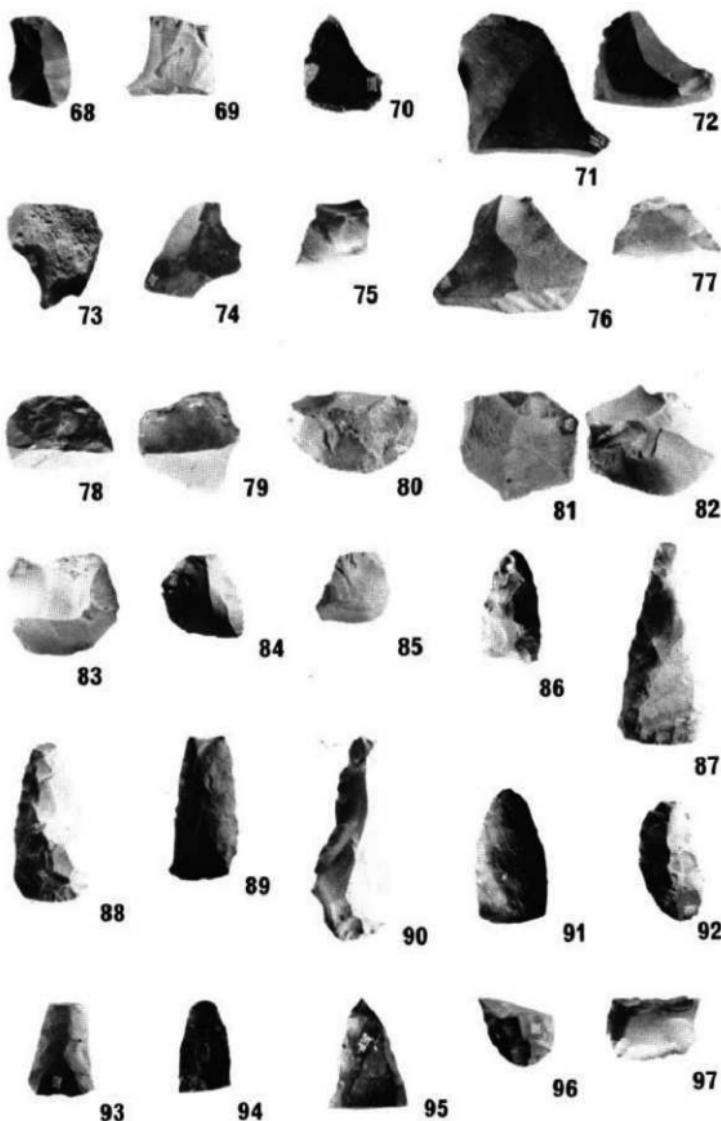
図版31 円盤状土製品



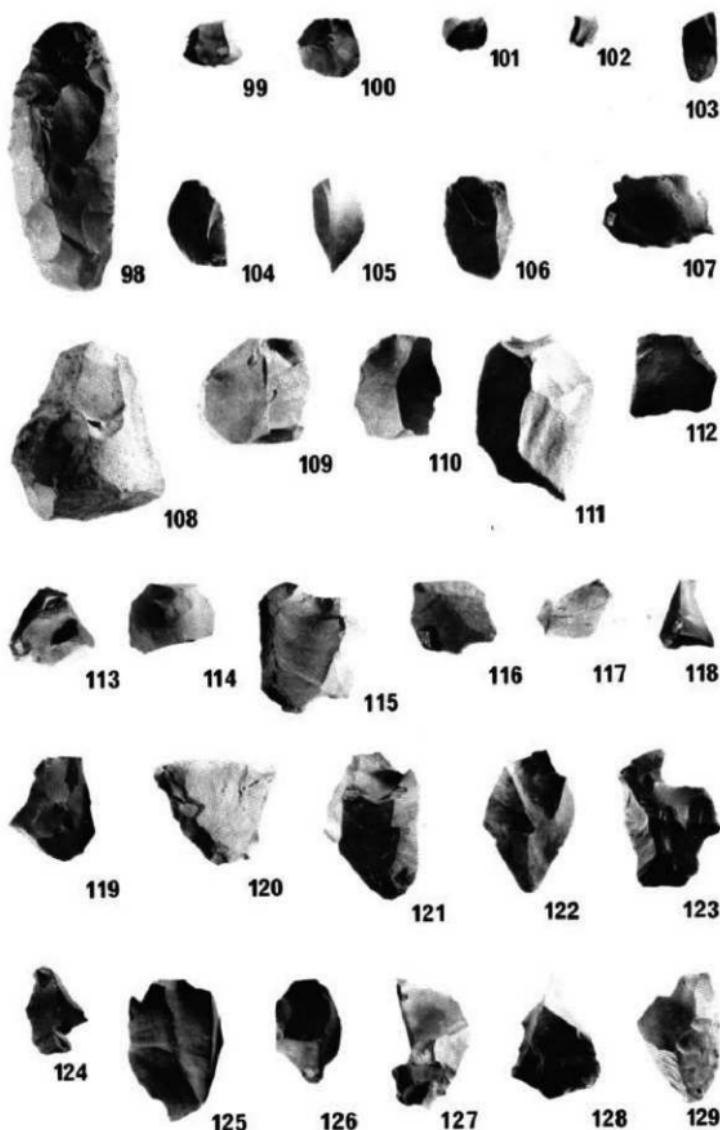
圖版32 出土石器(1) 石簇・匙狀石器・石槍・搔器



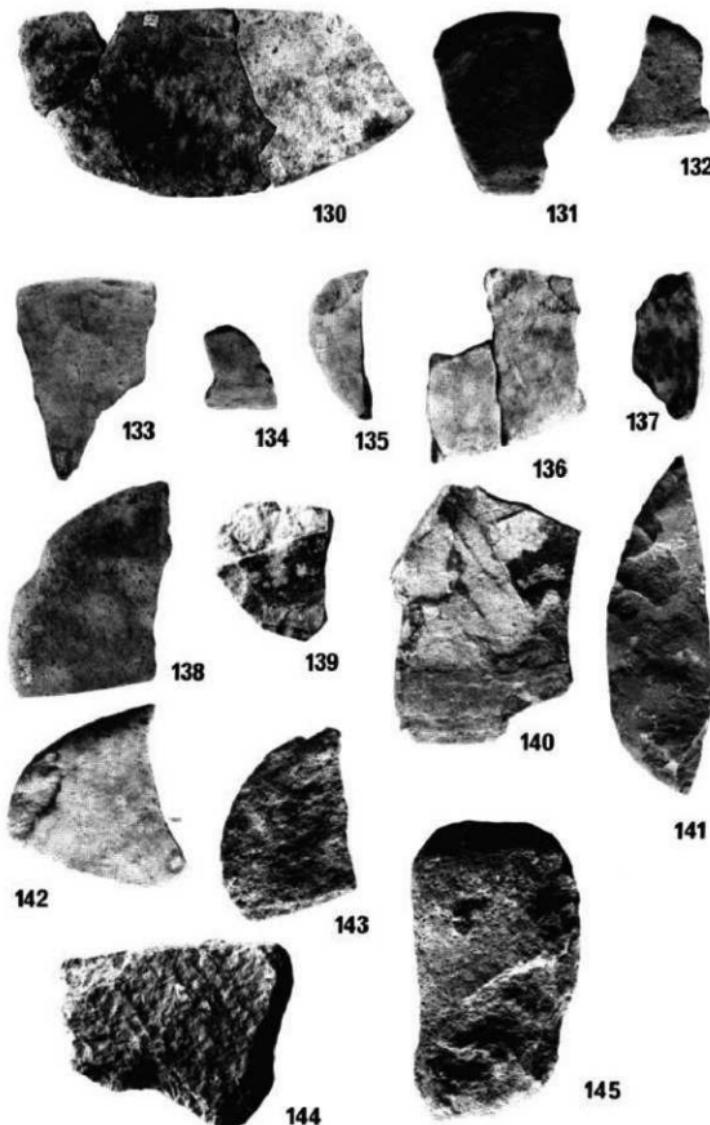
図版33 出土石器(2) 挖器・削器



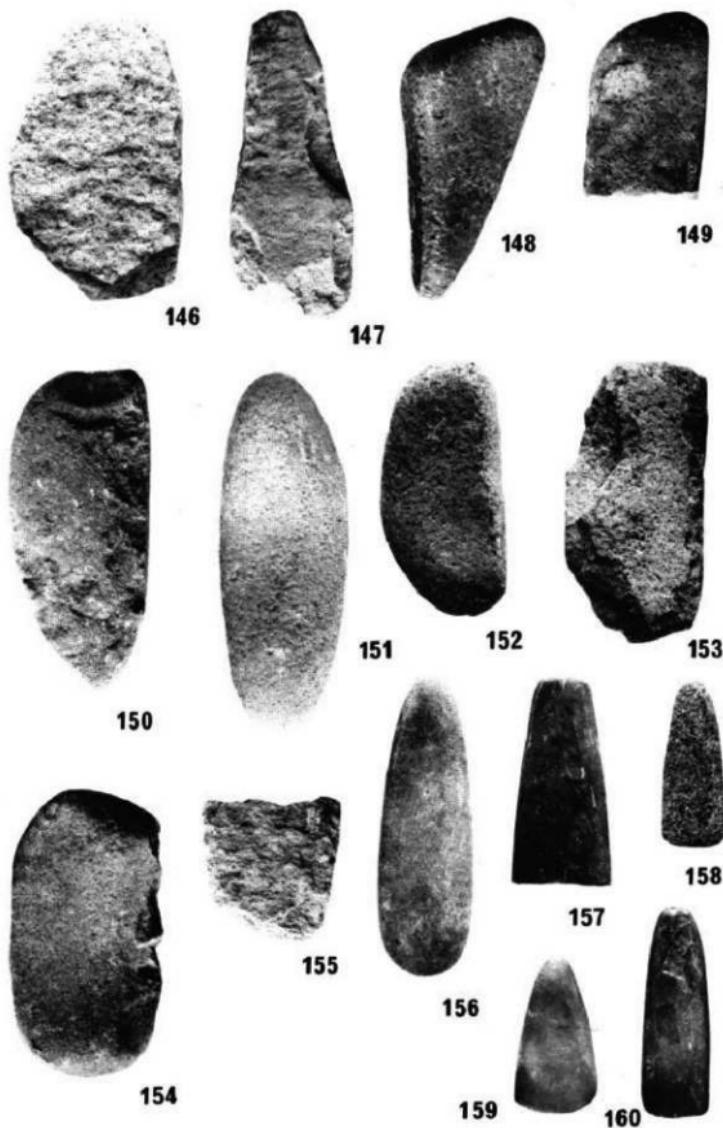
圖版34 出土石器(3) 削器·箒狀石器



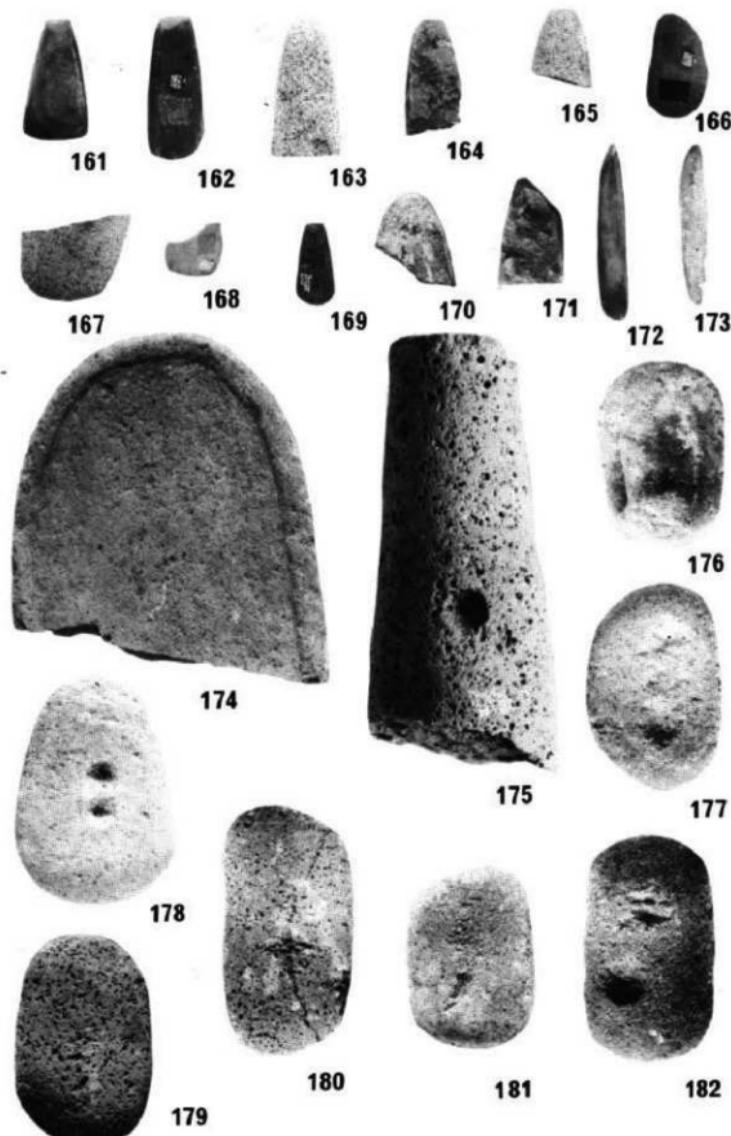
図版35 出土石器(4) 楕円形石器・小型円形石器・その他の石器



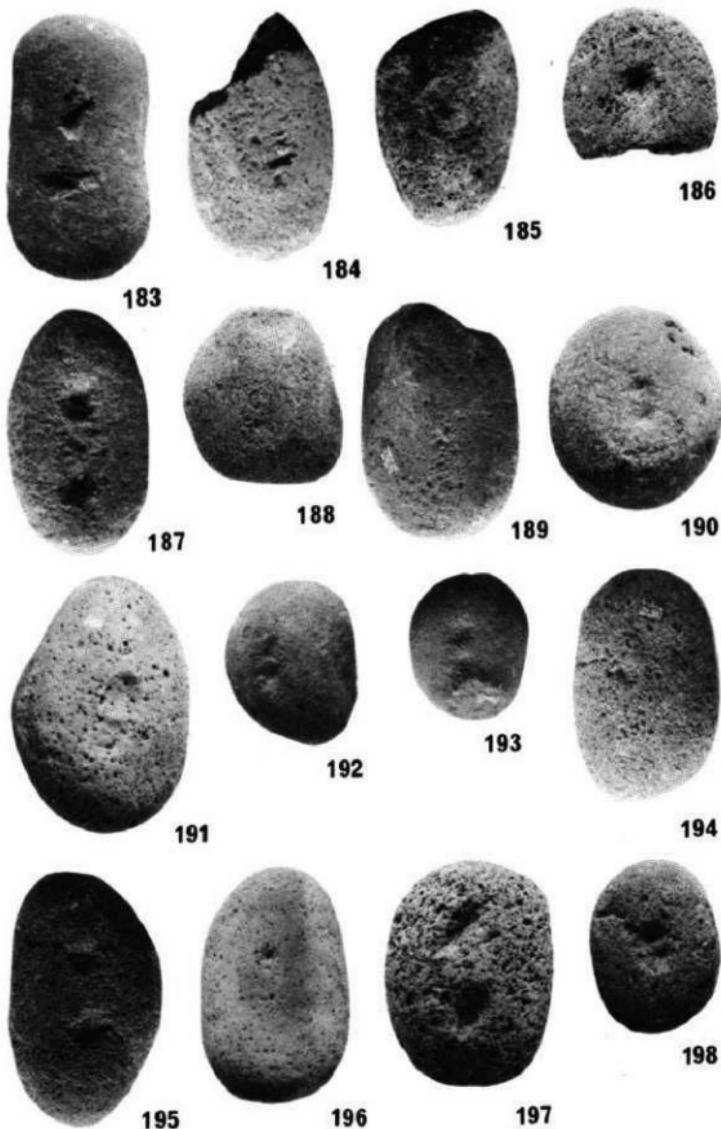
圖版36 出土石器(5) 半圓狀扁平打製石器・有擦痕打製石器



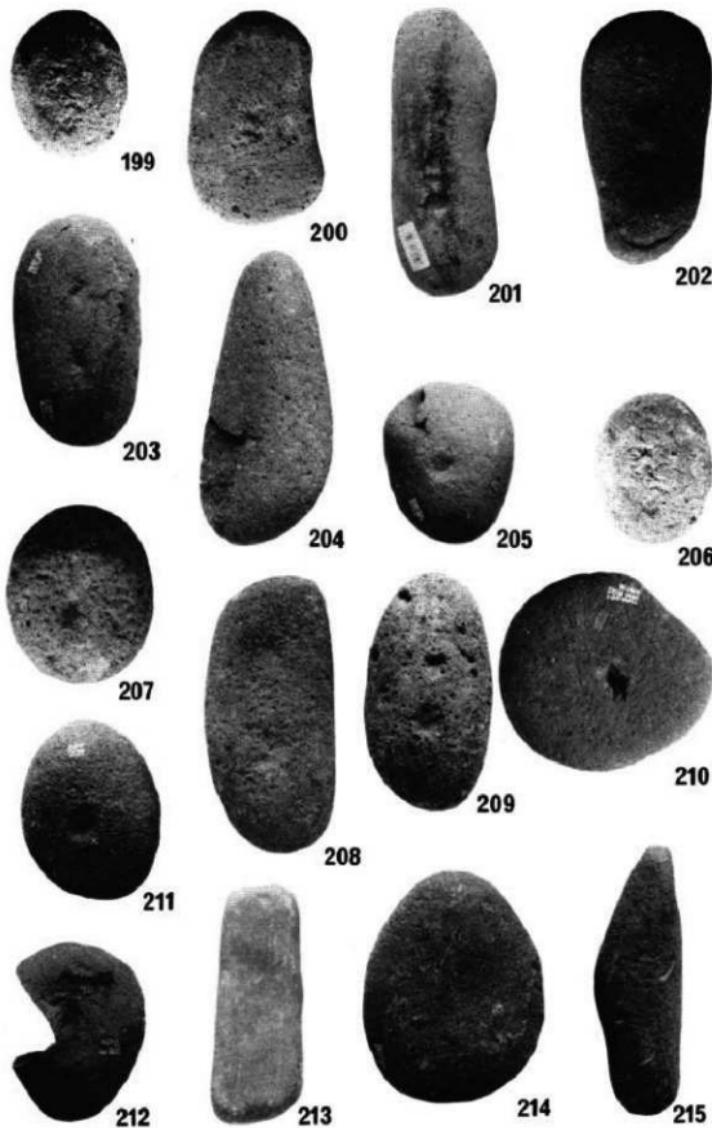
圖版37 出土石器(6) 有擦痕打製石器・磨製石斧



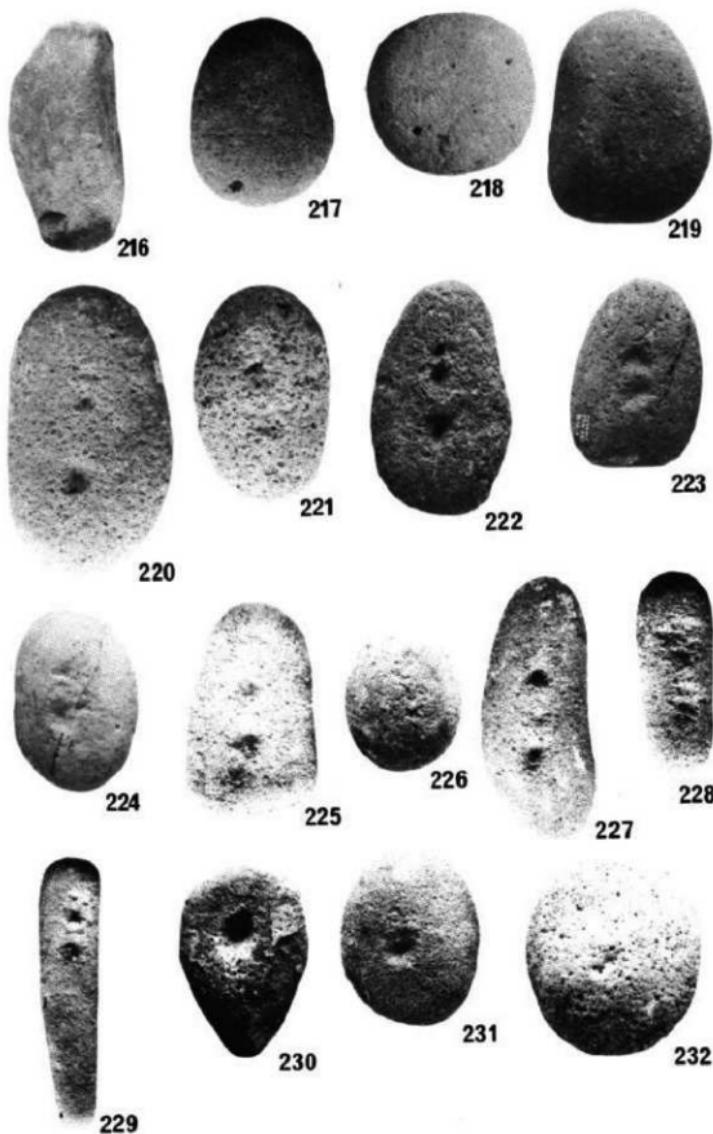
图版38 出土石器(7) 磨制石斧·磨制石斧梯石制品·石皿·石棒·多目的砾器



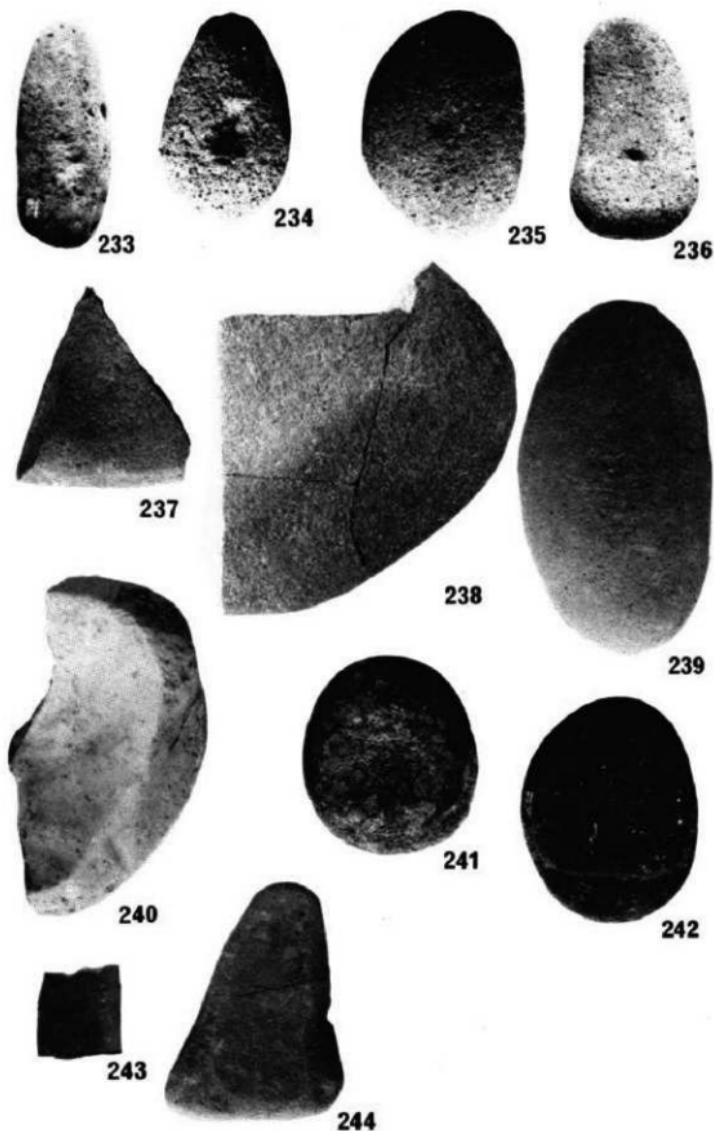
圖版39 出土石器(8) 多目的標器



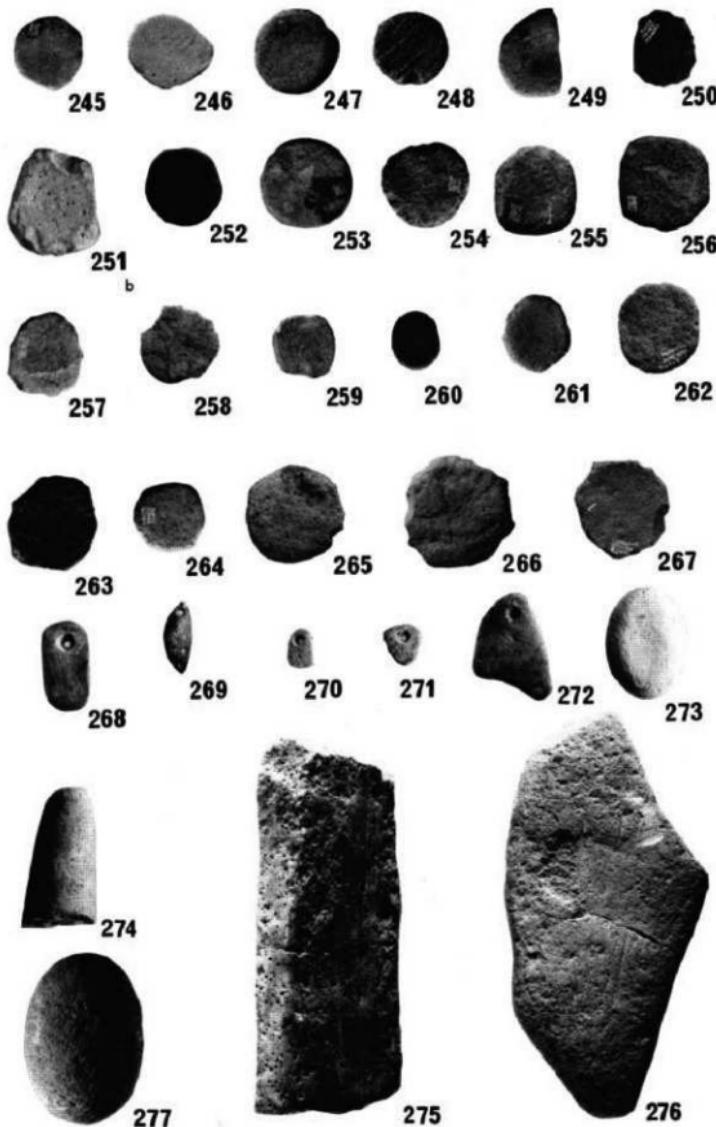
图版40 出土石器(9) 多目的砾器



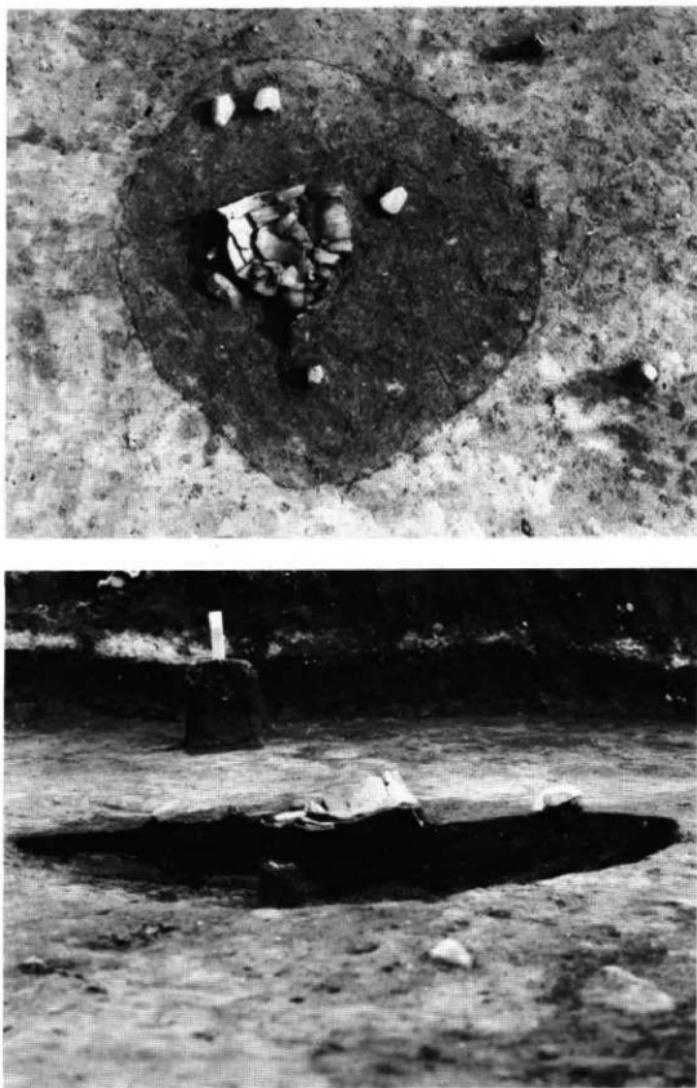
図版41 出土石器⑩ 多目的礫器



图版42 出土石器(1) 多目的砾器



図版43 出土石器⑫ 円盤状石製品・有孔石製品・線刻繩・有擦痕繩・有溝繩



図版44 上 SK 06 土壙（上が南）

下 同上 断面の状況（西▶）



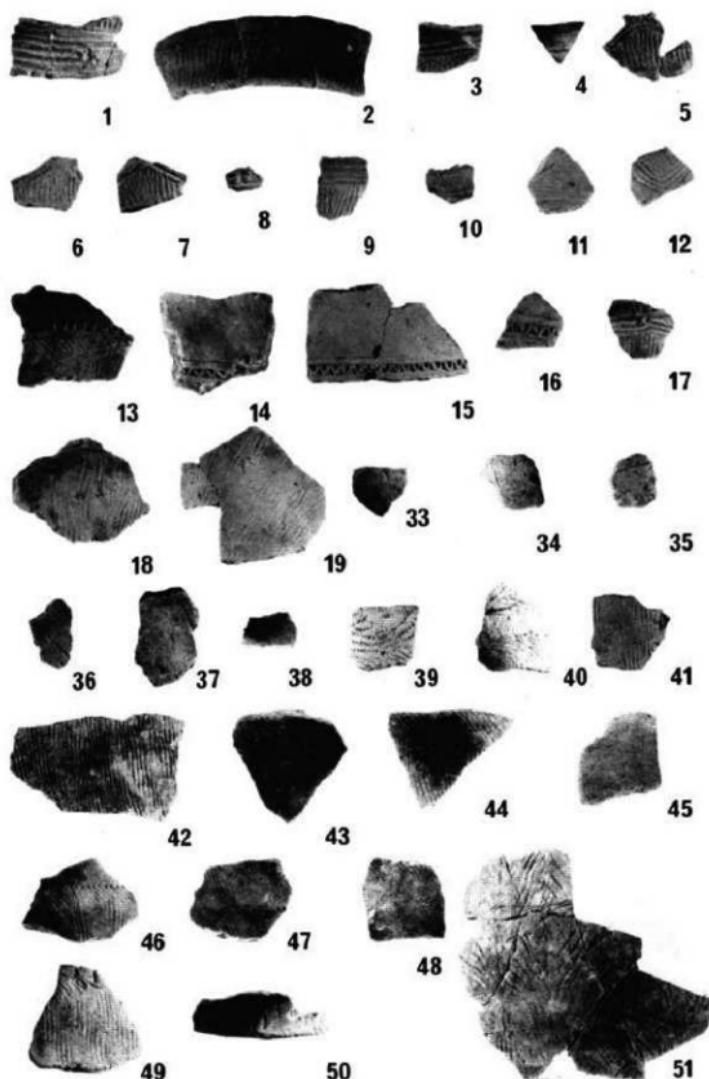
図版45 上 SK 02 土壌 (西▶)

下 同上 断面の状況 (西▶)



图版46 上 SK 06出土土器

下 SK 02出土土器



図版47 弥生時代I・II群土器



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32

図版48 弥生時代の土器



52



53



図版49 弥生時代II群5類土器・把手